【企画】とある創作の学園都市

こなつ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
【企画】とある創作の学園都市

【Ｎコード】
Ｎ４４１７Ｘ

【作者名】
こなつ

【あらすじ】
とある魔術の禁書目録の世界観で二次創作、つまりオリキャラだけで一から学園都市造っちゃおうぜ！という企画です。
オリジナル能力者同士を戦闘させて厨二病の血を騒がせたり、キャラ座談会するだけの簡単かつ適当な企画ですので、オリ主二次創作小説が好きな方、禁書の世界観ちゅっちゅな方、禁書かじってて戦闘狂の方、文は書けないけど絵ならイケル！みたいな方、ぜひどうぞ！！※レベル５は募集終了しました※
また、ある程度の縛りは存在するので、それを遵守できる方でお

願いします。

募集期間は２０１１年１０月９日から、管理人が飽きない限り延々と。

詳細説明【必読】

※参加なさる方は必読！※

ええと、まずこんな珍妙な企画なんぞに手を出していただいてありがとうございます。大ざっぱな説明はあらすじでしたとおりなのですが、こちらでは細かい説明をば。

◆とある創作の学園都市とは？
こなつが立ち上げた行き当たりばったりの企画です。オリキャラオンリー企画。主に戦闘シーンを書いたり書いたり、座談会も面白いんじゃないかなーなんて思います。あっ、『一から学園都市』というのはつまり、既存の能力者は一切居ないよ！ということになります。文は書けないけどキャラ提供だけなら、という人や、絵なら描けるよ！という人でも大歓迎。ぜひ。

◆参加資格
一切不問です。年齢も関係ございません。
ただ、マナーを守れればそれでいっこうに構いません。

◆参加方法
こなつ　［ＩＤ：１１３３３８］　こちらのＩＤにメッセージを送ってください。
件名に『企画参加』とか書いていただけるとありがたいです。
下記のテンプレをコピーして貼り付け、必要事項を記入してください。

氏名：
ＩＤ：

確認した後、こちらの方から小説の投稿方法などを送らせていただきます。

もしわからないことがあればご一報を。

えー、それではいよいよオリキャラ登録方法を。

◆募集人数

一人５人まで登録可能です。もちろんそれ以下でも構いませんが、どれだけ多くても５人です。

◆能力の強さ

募集する能力者は、レベル５は６人（あと１人は管理人が登録するので）、それ以下は何人でも可です。

もちろんレベル０でも構いませんが、戦闘企画だということを覚えておいてください。↑今更ですけど座談会（ｒｙ

※レベル５の枠は埋まりました！※

◆禁止事項

最強設定は原則無しとします。天下のレベル５でも、必ず弱点等を用意してください。

能力の内容については完全オリジナルでも、禁書本作から拝借しても構いません。ただし後者の場合、レベル５の能力を引用するのは禁止とします。

◆登録用テンプレ

参加表明のメッセージにコピーし、やはり必要事項を記入してくだ

さい。

【オリキャラ登録】
名前：
性別：
年齢：
レベル：
能力名：
能力内容：
容姿：
性格：

複数の場合はその人数分お願いします。また、能力内容に弱点なんかを書いていただけると嬉しいです。

◆座談会・雑談について↑ＮＥＷ！
だいふく様より、チャットルームをお借りしております。ぜひぜひご活用くださいませ。ただし、参加している方優先的にお願いします。

ＵＲＬ：ｈｔｔｐ：／／９４１３．ｔｅａｃｕｐ．ｃｏｍ／ｋａｍａｃｈｉ／ｃｈａｔ

座談会に関しては、日時等は管理人の方で指定する形が多いかと思います。指定は活動報告等でするのでチェックお願いします。
タイマンで語りたい！なんて人が居りましたら、それは各自こそこそ…というか、各自で連絡しあってくださいな！

長々と並べましたが、大丈夫でしたでしょうか？
如何せん企画を立ち上げるのは初めてのことなので、戸惑っていますが、お付き合いくださると嬉しいです。

１０月１４日、ちょっと改定です。／１１月２２日、事項を増やしました。

登録キャラ名簿

登録された能力者の名簿です。
あ～わの順で並んでいます。

【ａｓｕｔａ様より・ＩＤ１５７６６５】

名前：阿頼耶家康（あらやいえやす）
性別：男
年齢：１８歳
レベル：５
能力名：圧殺空間（プレッシャースペース）
能力内容：半径１００ｍ以内の圧力を操作する力。空気圧を操り物体を潰す、殴った時にかかる力を操り強化する、地面を蹴り上げる圧力を強め高速移動、圧電気によるレベル３クラスの電撃、圧力を使った電気抵抗を作り出す防御、圧力操作による真空の作成、内臓破裂がおきる程の空気弾攻撃などが可能。
また、能力がなくとも、彼には、信号機を叩き折って投げ飛ばす腕力、新幹線に追い付くスピード、トラックに跳ねられても無傷で生還する耐久力がある。
また、圧力操作で対処出来ない精神操作系の能力者、空間移動系能力者の体内への物質転移（内臓にナイフを突き刺されても平気だったりするが）等が能力自体の穴となる。といっても、後述の特異体質でカバー出来ている。

容姿：切れ長の目に、目の下に施したコウモリのタトゥー、後ろ髪の長い毛先をショッキングピンクに染めた茶髪が特徴な、ｔｈｅＧａｚｅｔｔＥの流鬼似の目立つ外見の美形。さらに、スカイブルーのタンクトップに、鯉が描かれたジーンズ、鎖で繋がれた銀色の

ヒトデ型の首飾りと、ファッションもとにかく目立つ。さらに、身長が１９９ｃｍとデカい。体系は細身な方。

性格：能力者を（自分も含め）ある理由で嫌悪し、反対に無能力者には困難が降りかかれば体を張り、命をかける。傲慢で、馬鹿で、直情的で、キレやすいが、底抜けに優しく仲間思いで、後輩や後述のスキルアウトの新人にとっては面倒見のいい兄貴。また、アニメ好きで、ボカロ好きという、なかなかオタクな人。眼鏡っ娘好き。

一人称は俺。二人称は

能力者と無能力者を狙うようなスキルアウトしか食い物にしない、最低最悪最強と評されるスキルアウト『チーム』のリーダー。掲げる目標は、『学園都市を無能力者にとって安全で、能力者にとって危険な街にすること』。スキルアウトなのでアンチスキルに何度もお世話になっては、牢屋を壊し脱獄している。

また、彼は嗅覚が異常に鋭く、ＡＩＭの匂いも嗅ぎ分けることが出来る。これで能力者の種類や、レベルが分かり、この特異体質で能力者かそうでないかを分けている。また、これはかなり正確で、能力者が演算をし、能力を発動するタイミングまで分かる。これを使い、自分の弱点となる種類の能力を持つ能力者が能力を発動する演算のタイミングに、攻撃をいれ妨害する戦法をとる。

【ユーシン様より・ＩＤ１７２０３３】

名前：茨野（いばらの）　アゲハ

性別：女

年齢：１８歳

レベル：４

能力名：超進化（テンペスト）論

能力内容：遺伝子（バイオ）操作系能力者で、遺伝子を歪め、新種の植物『茨野新個体』を造る。動物にも通用するがかなり危険な作業なので自分にしか行っていない。『茨野新個体』の何種かは神経があり茨野の背中に造ったアクセス部分に接続し手足のように振るうことができる。

容姿：木の幹のような色で、腰まで伸びるロングの糸のように細い髪と、手足に鎖付けて引きずっているような歩き方が特徴的。眠ってしまいそうにみえる目つきで、唇は色も厚みも薄い。背中の中心部分は円盤を埋め込んだように変形しておりここで脊髄に『茨野新個体』をつなげている。服装は黒が多い。

性格：基本的には自分が住んでいる植物園で植物の世話をしており、人には興味なさげに見えるが、常連や知人には声を掛けるなど他者を遠ざけている訳ではなく、騒音や雑音を発するモノを嫌っている。口調は上司のような命令口調で一人称は私。

【アポリオン様より・ＩＤ１２１２２５】

名前：岩見祥吾（いわみしょうご）
性別：男
年齢：２７歳
容姿：いつもシンプルな形の般若の仮面（口の部分が開いているので、つけたまま飲食も可能）を着用しているが、外すと火傷の跡（家が放火された際に左眼辺りを火傷）があるものの意外に整った顔立ちである。その醜い傷を隠すため、仮面をとろうとしない。取ろうとすると例え誰であろうと、極めて冷酷で殺意に満ちた目で威圧する。身長は１７４ｃｍぐらい。後の特徴といえば、黒のビジネス

スーツ、白い汎用手袋と黒色の革靴ぐらいか。

職業：必殺仕事人

性格：人と接するときに、愛するか殺すか無関心かという極端な感情しか持てない。基本的に好戦的で、感情の赴くままに多くの人間を理由なく殺害し、数多くの人物から「人間じゃない」とまで称されている。その生い立ちから銃を持つ警官複数を生身で倒すなど、戦闘能力も極めて高い。その暴虐さゆえ「射殺止むなし」とまで言われている。

家族が殺害されて以降は、「泥を食ったことがある」と語るなど浮浪者のような生活をしてきたらしく、その名残からかトカゲを焼いたり、生卵数個をコップに割って一気飲みしたり、ムール貝を殻ごと食べたり（噛み砕いたが飲み込み切れなかった貝殻の破片は流石に吐き出す）と、人間の域を超えた悪食ぶりを見せる。しかし、最近は学園都市に住居を持っているせいか、自宅周辺のコンビニを強盗し、、食料や生活用品などを大胆に盗ってきている。時々、スキルアウト達から殺して奪った札や硬貨を強盗した店に代金として置いてきている。

また途中で辞めているとは言え、高校や仕事をしていた事もある他、自動車を運転する際はちゃんとシートベルトをし、焼きそばを食べる際はお湯を捨てるなど意外と律儀なところもある。そして意外にも女性や子供には優しい。でも、あまりに身勝手・理不尽・ふざけた人だとイライラして殺そうとする。

案外好きな人には尽くす性格で、タイプの女性と一緒にいるときはイライラもなくなってくる。その人が危険に陥るなら自分の命を顧みずに助けにいったりもする。基本美人であれば仲良くなろうとするが、性格がわがまま・高飛車・イラッとするような言動などであれば脅して態度を改めさせようとし、相手に対するイライラが一線を越えれば殺そうする。インデックスあたりが危ないかもしれない。

特に無理難題でもない限り女性の頼み事は基本的に聞く。理由は「好かれたいから」であり、これは幼い頃に家族が殺されてしまい、愛されることがなくなってしまったからだと考えられる。
上記の通り男性に関しては基本「殺す」対象ではあるが、心を開いた者は例外であり、食事に誘うほどにまで仲良くなることが可能である。ちなみにサディスト。酒には強く、酔った奴を肴にするレベルではあるのだが、自分からは飲む事はなく誘われた時のみである。お酒はあまり自分からガバガバ飲むタイプではなく、誘われたら飲む、というより誘われたら大抵の事は快く乗ってくれる。特に美少女のお願いなら尚更。ノリはいいほうである。でも、性格が酷い場合はキッパリと断る。超能力への関心は殺すが面倒になる程度。魔術に関しての知識は全くの皆無である。
２０年前に無差別放火魔によって住んでいた家と家族を失い、復讐の為に自分もまた無差別殺人鬼になるという過去を持つ。現在はもちろん全国指名手配犯である。ちなみにすでに仇である放火魔は自身の手で殺害済みの様子。何度か政府要人暗殺請負人「死神」として殺人をよくやっており、その他には密偵のお仕事も数回行い、その際の成果は上々のもの。そのどちらも気まぐれでやっていたようで、報酬は現金、しかも持ち運べる量と依頼人に釘を打っていた。
現在は第１０学区のボロいアパートの住民を皆殺しにし、その一室に住んでいる模様。コンビニ強盗やスキルアウトの虐殺をしている。目的のために他人を幾度となく騙して利用するなど、頭も非常に回り戦闘時にもその傾向がみられる。

身体能力：膂力に関しては、並みの能力者を圧倒するレベルである。戦闘力を能力者レベルで表すと、軽く見積もってもレベル４上の上クラスに相当し、最悪レベル５上の中クラスであると噂されている。刀を主に使うが我流で、「斬る」や「突く」というよりは、「叩きつける」といった豪快な力押しでの戦闘を好む。そしてこれが通用しない場合は、抜刀術や突き技にすぐさまシフトする。瞬発力や短

距離の移動速度については武術を極めた人間でも見切るのことは難しい。長期戦も苦手ではないが、面倒なので避ける傾向がある。常に戦いの中に身を置いていたため、眼光が鋭く、大抵の者はこれを見るとしばらく動けなくなる。ちなみにこの眼力、リラックスしている時は緩む。身体能力に関しては、一般的な常人のそれとは比較にならないほどに高い。西洋刀なしでの戦闘を行うことも可能で、どこで学んだのかは不明だが、主に拳法を使う。（殺しを目的とする戦闘を行う場合、決まって「イライラするんだァ・・・！」という言いながら、首を回すという癖を持つ。）

一人称及び二人称は俺、お前又は相手の名前

何だかんだ言って、可愛い女の子には甘い。

好みのタイプは性格は従順で髪型はボブカットに近いもの。それ以外は特にこだわっていない。（胸に関しては特に選別基準ではないが、どちらかというと大きい方がいいらしい。）五和のような子が好きの様子。次にオルソラや佐天らしい（佐天はボブではないが、性格が気に入る模様）。年齢で考えると中高生が好きで、熟女や人妻は嫌い。

通称死神。名前の由来は上記のような外見に加え、容赦のない連続無差別殺人が原因だと思われる。活動範囲は学園都市全域。そして神出鬼没。が、戦いが起こっている場所には血の匂いを嗅ぎつけて高確率で現れるようである。

【ティンク様より・ＩＤ１７６４６７】

名前：Ａ０１（エースぜろいち）　機械化前　相澤一（あいざわはじめ）

性別：男（機械化前）

年齢：９＋４（機械化後）

レベル：０

設定：通り魔に刺されて、死にかけたところをとある浮浪者に助けてもらい、サイボーグになる。普段は人工皮膚でメタリックボディを隠している。機械の体であるため、海に入る事ができない。（プールとかは平気）
体内のチップさえ無事であれば首を斬られても平気。また、すぐにくっつく。やむを得ずビルを破壊してしまった事があるが、警察には特になにも言われなかった。サイボーグになっても五感は感じるようだ。
エネルギー源は人間が食べるご飯でオーケー。１日一回油を飲む必要がある。
浮浪者に助けられてから誰かを守れる人になろうと決めた。が、一人を守るために多くの悪人を病院送りにしてきた。好物はカレー。きらいなものはゴーヤ。
バックドロップで学校の校長を泣かせてしまったことがある。機械のクセに機械オンチ。ウィンナーとソーセージの違いがよくわからない。機械なので電車や飛行機に乗ることができない。
電気店に行くと必ずといっていいほど防犯装置を誤作動させてしまう。彼がつくるラーメンは絶品であり、友達である植木に「お前は主婦か！！」とよく言われる。キリンのモノマネがめっちゃウマイらしいが、誰も見たことがない。６歳の時まで１０の次を１００だと思っていた。
一年ごとに部品改造してもらっているため、背はふつうに伸びている（ように見える）
一人称俺　二人称お前　テメエ　植木のみ植木っち
戦いの途中で名前わ聞かれると、「知りたきゃ俺に勝ってみな！！」とかならず言う。人ならざる者同士植木とは気が合う。
戦闘スタイル：基本殴る、蹴る。機械化前に空手を習っていたようで、なかなか強い。機械なのでパンチやキックがかなり痛い。あまり使わないが、腕がガトリングがわりになる。（３０００発）弱点

は電撃使い（エレクトロマスター）に極端に弱い事。
容姿：メタリックボディ、人工皮膚を装備。黒の髪に学校の制服。
顔は子供っぽい。背は低い。

【だいふく様より・ＩＤ１９１００２】

名前：御伽有栖（おとぎ ありす）
性別：男
年齢：１７の高２
レベル：５
能力名：幻想空間（ワンダーランド）
能力内容：自身の知りうるあらゆる物理法則や物理現象を無効にするだけではなく、ある程度の変更すら可能とする。
最大は御伽を中心に半径１０メートルまで。
一方通行のような無意識下での能力使用をしており、その時は体表から３０センチのところまで使用している。
弱点は知っている物理法則ではない攻撃。ちなみに御伽は既存の物理法則は全て把握している。
提督んには基本勝てない。
物理法則を掌握すれば勝てるけど。

容姿：なんか雰囲気は一方通行に似てます。金髪碧眼の切れ長で、髪形は一方通行っぽいけど少し長い。
１７２ｃｍの痩せてるイケメンさん。

性格：色々あっさりしてる、諦めが早い、やや謙虚、などなど。
戦闘になると積極的な性格に変わる。

口癖は「夢がない」一人称は俺。
本名を知っている人物はアレイスターのみ。他は謎の死を遂げたっつか彼が殺した。
学園都市では能力名の『幻想空間（ワンダーランド）』と呼ばれている。

【だいふく様より・ＩＤ１９１００２】

名前：朧江相馬（おぼろえそうま）
性別：男
年齢：１７歳で高二
レベル：０
能力名：能力記憶（スキルメモリー）
能力内容：無能力は勿論、超能力まであらゆる能力の影響を受けると、その能力の「自分だけの現実」を記憶して、時間制限付きで一度だけ使用する事が出来る。
能力が強いほど時間は短くなる。
この能力の解説をすると、朧江は自身の「自分だけの現実」を自分の意思で使用する事が出来ず、他の能力の影響を受けた時にその「自分だけの現実」を上書きすることでその能力を使用する事が出来る。
そのため身体検査では無能力者判定とされている。
ストックは多数あり、知り合いに発火能力者がいるため頻繁に使うものは強能力の発火能力。
能力の影響を受けると言うことは能力による攻撃を受けなければならないということなので、能力を記憶するときは必ず一撃喰らわなければならない。
容姿：身長は１７１ｃｍほど。

中肉中背で髪は前髪は眼が軽く隠れる程度、サイドも耳に少しかかる程度で後ろ髪は少し長めの黒髪でところどころ寝癖がある。
美形と言う程ではないが顔は整っている。

性格：クールと言う程ではないが落ち着いている。
正義感が強く、人を助けることもしばしば。
一人称は俺で、口調は上条が落ち着いた時みたいな喋り方。（僕の書いた小説を見ていただければ分かりやすいと思います）
恋愛に関しては全く興味がない。

【オウニンポヤ様より・ＩＤ１７４５３８】

名前：風祭（かざまつり）　涼（りょう）
性別：女
年齢：１４歳
レベル：５
能力名：大気支配（エアリアル）
能力内容：元々はレベル１の空力使い（エアロハンド）であったが、事故で視力を失ったことでそれを補うために大気感知能力が急激に拡大し、レベル５の大気支配（エアリアル）へと進化した。
戦闘にあっては突風やカマイタチといった空力使い（エアロハンド）一般の能力のほか、
１・気圧を操作することで相手を押し潰したり、低酸素症（高山病）に陥れる。
２・大気中に含まれる水蒸気を摩擦させ発電、落雷を起こす。
３・身に纏った水蒸気で光を屈折させ透明化する（本人が可視光を捉える必要がないため完全透明にもなれる）。
４・気温を操作し燃焼・冷却（凍結）させる。

５・窒素を操作しての窒素装甲（オフェンスアーマー）を身に纏う。盾として板状に展開することも可。
６・大気の動きから周囲の状況を把握できる。本人は視力が無いものの、この力で目視以上に周囲が視えている（大気の動きを演算し、画像として処理している）。側面・後方も感知しているため、基本的に死角はない。
７・風を操作し飛行が可能。
など、大気そのものを武器とする。
本人は６の能力を使い周囲を完全に把握しているものの、どうしても視覚より反応が一歩遅れてしまうため、接近格闘戦を苦手とする（そのための窒素装甲（オフェンスアーマー）である）。
そのため、相手との距離を取り、（繊細な戦い方が出来ないわけではないがこちらの方が簡単なので）ごり押し的な戦い方を専らとする。

容姿：１５０ｃｍ、４０ｋｇ。
明るい茶色の髪で脛まで届く長いポニーテール。目も同じ色だが、盲目のため光がなく無機質な印象を与える（御坂妹に類似）。
常盤台中学に在学のため服装は常に制服を着用。
能力で周囲を把握できるため無くとも全く支障はないが、白杖を常に持っている。

性格：口数は少ない方で通常はおとなしい。しかし「盲目」という禁忌に触れられた場合は豹変し、相手を殺すことも躊躇しなくなる。豹変モードでは全く喋らなくなり、周囲の空気が瘴気化するようなオーラを放つ。素直に謝れば「一応は」許すが決して忘れず、機会があれば報復する。一人称は「ウチ」。

【ＩＴＥＭ様より・ＩＤ１８４６０１】

名前：神鬼大和（かみきやまと）

性別：男

年齢：１３

レベル：５

能力名：事象選択（オールセレクト）

能力内容：発生した事象に対して選択肢を持つ事が出来る。簡単に言えばあった事をなかった事にしたり別の結果に変更出来る。選択出来る事象は発生した事象のみで未来の事象に対して選択肢は持てない。また自分を除く人体への能力の直接の使用も出来ない。

容姿：髪型は鏡音レンと同じで鮮やかな茶髪。いつもホストの様な服装をしている。身長は美琴より少し高いぐらい。非常に端正な顔の持ち主でかなりのイケメン。

性格：口調と共に超攻撃的。基本的に慣れないは好まないが積極的に避ける訳ではない。残忍かつ冷徹。だが決して外道な訳ではなく無駄な争いはしない、する気がない。一人称は『オレ』

能力者でありながが聖人の頂点に君臨する『完全聖人』でもある。完全聖人は聖人と違い神と全く同じ特徴を持ち、それゆえテレズマを完全に操り身体能力も通常の聖人の倍に匹敵する。戦闘時には能力よりも圧倒的な身体能力を駆使する。最強にも見える戦闘力だが身体自体は普通の子供なので人体への負担が大きい完全聖人の力やテレズマで長時間の戦闘は出来ない。

【助けてください様より・ＩＤ１２５５７３】

名前：神夜恭介（かみやきょうすけ）
性別：男
年齢：１５歳
レベル：Ｌｅｖｅｌ０
能力名：暗黒火焔（ダークフレイム）
能力内容：黒い炎を使う能力者。設定上では、上条さんの幻想殺しでも消せなく、一方さんの反射も通じないという設定です。欠点は、他者より譲り受けた能力のため、たびたび暴走し、上手く使いこなせない時がある。
容姿：身長１６８ｃｍ、体重５２ｋｇ。上条と同じ制服を着ているごく一般の高校生。細身で、ぱっちりとした目が特徴。
性格：良く笑う明るい性格。争うごとを余り好まない性格で、能力に身を委ねるのは本当に危ない時だけ。口喧嘩に非常に弱く、いつも謝ってばっかり、

【ティンク様より・ＩＤ１７６４６７】
名前：川中植木（かわなかうえき）
性別：男
年齢：１３
レベル：０
能力名？：『新天界人（ネオ）』、『職能力（ジョブ能力）』
能力内容：『新天界人』自分でゴミと認識したものを木にかえる能力。（あくまでゴミがないと使えない）ゴミが木になり、その木がゴミと認識されてさらに木としての形をかえ、とリサイクルする。

そのサイクルを他者の能力へと影響させる『回帰』は、あらゆるものを元に戻す（演算を元に戻す）ことが出来る。ただし万能ではなく、元に戻しきれないものもある。（だいたいは相殺される）あくまで能力で木を出している事が発動条件。

天界力のコントロール　そのまんま。自らの中に眠る『天界力』をコントロールして、『燃え状態』になる。（身体強化）少しでも気を抜くと暴走してしまう事が難点。

神器　ゴミがないと使えない。『回帰』をつけることも可。

一ツ星神器　『鉄』巨大な大砲を出現させて木の弾丸を打ち出す。『自覚』の神器。

二ツ星神器　『威風堂堂』鉄甲のついた木の腕を目の前に出し、防御する。『忍耐』の神器。

三ツ星神器　『快刀乱麻』刀を召喚して切る。大きさは自由自在。『不惑』の神器。

四ツ星神器　『唯我独尊』顔のついた巨大な立方体で相手をかみ砕く。『渾身』の神器。

五ツ星神器　『百鬼夜行』ブロックで相手を突く神器。攻撃の他にも橋やエレベーターがわりにすることも。『集中』の神器。

六ツ星神器　『電光石火』高速移動できるローラーブレードのような神器。使用中はジャンプ不可。『先読み』の神器。

七ツ星神器　『旅人』地面に碁盤状のマス目を出現させてそこから0，5秒で相手を箱の中に閉じ込める。中からは壊せないが外からは簡単にこわせる。相手に動き回られると捕縛できない。『持続』の神器。

八ツ星神器　『波花』巨大なムチ。『把握』の神器。

九つ星神器　『花鳥風月』黄緑の翼で空を飛ぶ。『バランス』の神器。

十ツ星神器　『魔王』自分の思いの強さほど強くなる生物神器。植木の場合はなぜかブルーアイズホワイトドラゴン。6発しか使うことができない。

『職能力』
『モップ』に『？』を加える能力。右手にある紋章からモップを出す。モップの先は自由に伸びて、対象を掴める。ただし、直線のみ。
容姿：黄緑色の髪の毛。手に黒のリストバンド。あとはふつうの中学生。
性格：一人称僕、二人称君、知り合いには○○君、さん。基本優しい性格。だけど怒ると手がつけられない。好物はラーメン。
あくまで天界力を使う能力なのでＬＥＶＥＬは０（そもそも能力開発をうけていない）

【黒炉様より・ＩＤ１４０３６９】
名前：霧崎美鈴
年齢：１６
レベル：４
能力名：獄炎魔獣
能力内容：炎の中から魔獣、ケルベロスを生成する能力。生成したケルベロスには石があるらしいが、真偽については美鈴のみぞ知る。炎さえあればどこでも生み出すことができるため、常にライターを持ち歩く。普通の発火能力者と違い、自身の力で発火させることができず、炎の操作もできない。能力の影響からか、炎による火傷や、熱さを感じることがない。
容姿：身長１５４ｃｍ、ピンクブロンドの髪を三つ編みにしている。目の色は澄んだ藍。赤い服が好み。

性格：おっとりしていてドジ。高レベルの割に成績も低い。静かな性格で、ほんわかしている。好きなものは犬、赤いもの、辛いもの、恋バナ

【瀬河ナツ様より・ＩＤ１３６８５１】

名前：坂崎和華（さかざきかずは）
性別：女
年齢：１５歳
レベル：４
能力：痛み分け（ダメージセパレイト）
能力内容：自身が受けたダメージを相手にも与える能力。相手の名前さえ知っていれば発動するが、与えた本人にしかダメージは返せない上に、名前を知らないとダメージは返せない為少し不便な能力。ただし、和華本人が自分を傷つけた場合のみ、ダメージを与えたい相手全員にダメージがいく。

容姿：黒髪で目が隠れてしまう程前髪は長く、後ろ髪も腰くらいまであり、目の色は赤、身長は普通です。私服は暗い感じの服オンリーで。

性格：基本的に暗くて引っ込み思案。例外として秋風（以下参照）にだけは明るい（が引っ込み思案なのは変わらず）自分の友達が傷つけられると、とても残忍な性格になる。
どーでもいい補足、何気に身体能力が高い。普段から藁人形をデフォルメにした人形『ウラミー』を持ち歩いている。

【フニョ様より・ＩＤ１４５８４７】

名前：草壁修（くさかべしゅう）
性別：男
年齢：１７
レベル：４
能力名：情報戦略（オペレーション）
能力内容：情報を操って物に情報を付与したり演算を邪魔したり出来る
脳にかかる負荷が一般的な能力より高く１日に１時間しか使えない
使用方法　例：そこらへんに転がっている石に視覚情報を付与しその石から大量に煙が出ているように見せることが出来る
（五感すべてに影響する情報を付与することは出来るが高難度演算が必要になるのであまりやらない）
普段はサポート（情報収集＆交渉）に徹している
レベルが大きくなるごとに操作できる情報の量が変わる
主人公はレベル４なので他人に情報を”付与”は出来ない（他人の体から煙が出ているように見せるなどは出来ない）
戦いでは近くにある石に自分の姿の情報を付与し（簡易的に説明するとホログラム）それを囮に銃で攻撃したり日本刀の長さを短いナイフに見せて間合いを勘違いさせたりして攻撃するのが主流
容姿：綺麗な黒髪ロングで目は黒色　顔は良く体は中世的でよく女に間違われることから
初対面の人にはしっかりと男と認識するように自分の体に情報を付与したりする
性格：思考がずれている、天然に近い

一人称は基本『俺』基本チャラ男口調だが真面目なときはチャラ男口調をやめ普通にしゃべる（イメージとしては土御門に近い）
好奇心に基づいた実験の協力を頼んだりすることはあるが相手が嫌がることはしない主義
例：電気系能力者と二人で協力すれば無料で地デジ見れるんじゃね！？

　といきなり考え始めそれを理由に協力を求めようとする
↓断られた場合は「あっ、嫌？ああ、なら良いんだよ別にー」とあっさり引き下がる
あまりされることはないがＯＫされたら実権後飯をおごるなど礼は忘れない
基本ＬＶは気にせず広く浅く付き合うタイプ

【管理人より】

名前：細波（さざなみ）　六月（むつき）
性別：女
年齢：１６
レベル：１
能力名：衝撃貯蓄（ダメージカウンター）
能力内容：受けたダメージを好きなときにエネルギーとして放出できる。ただしレベル１のため、ダメージを受ければ痛いし長時間エネルギーを溜め込むことができない。使い勝手の悪い能力ともいう。
容姿：ぼっさぼさの赤い髪に、よれよれのセーラー服を着ている。目の下の隈は濃く、正直妖怪にしか見えない。ストレスをそのまま具現したような人。身長１６４センチ。

性格：かなり自虐的な人。被害妄想が強い。ただ足が常人より速いことだけが自慢らしい。戦闘は大抵「いいよどうせあたしをいじめて楽しむんでしょいいよやればいいよ」みたいなノリで受けてくれる。喋るときは一気に喋る。どんなに長くても息継ぎ無し。一人称は『あたし』。

【灰空様より・ＩＤ１８５４１９】

名前：守道途鷹（すどう みちたか）
性別：男
年齢：１８
レベル：５
能力名：元レベル３「頭上注意」改造後⇒「完全移動（パーフェクトテレポート）」
能力内容：触れたモノは当然の事、彼の能力は視界の中に移っている者すべてを自在に動かす事が出来る。
ただし本来の使い方では自分の体の周りに薄く触覚を作っており、それに触れると同時に接触箇所を含めた直径３０ｃｍの円状に抉れて、抉られて消失したモノごと１１次元を経由して上空にテレポートする。
自身をテレポートしながら周囲にある武器になりそうな物を使って攻撃してくる。

容姿：
いつもくろーい制服に雨カッパを被りを着ている
目には生気はなくマスターからの依頼がなければただの人形にすぎない。

性格：テレポーターの弱点である感情や痛覚は脳を改造する事で完

全に除去されている。そのため暗算のミスなどはない。変わりに感情はほとんどない。ただもくもくっとターゲットを追い詰めて殺すただし、彼も人なので皆から波状攻撃＋フルボッコされたら死にます。

【管理人より】

名前：竜守綾季（たつもり あやき）
性別：女
年齢：１４歳
レベル：５
能力名：万有引力（アトラクタ）
能力内容：あらゆる引力を操作する能力。正確に言うと、物体と物体の間に存在している引力を強めたり弱めたりできる能力。質量さえあればそれは可能だが、綾季の視界に入っていなかったりすると操れない。（自分を軸にして周りに干渉することは可能）つまり効果範囲は綾季の目が届く範囲。光や音、熱などは質量を持たないため操れないが、大気中の水蒸気やら何やらでどうにかしてしまう。質量の限界は水素レベルの小さな分子から、クジラさんだって大丈夫。電子同士の引力を操り、電磁波を発生させることも可能。攻撃に使えもするが、逆に電気を打ち消すことも可能。超電磁砲は打ち消すことができる。万能な能力である。

容姿：身長１４８センチ。肩までの青みがかった黒髪を無理やりポニーテールにしている。万年半袖短パン少女。

性格：基本荒事は好まない、というか大嫌い。戦闘になっても第一に逃げることを優先するような子。普段では負けず嫌いだったりす

るけれど元気娘。というか聖母。一人称は『綾季』。「喧嘩っ！？だ、だめだよだってそんなことしたら……痛いよっ！！」みたいなことを言って相手の神経を逆撫でさせるのが得意。ただし無自覚だけれども。

【ａｓｕｔａ様より・ＩＤ１５７６６５】

名前：テレサ（大王命名）
性別：女
年齢：（大王の見立てでは）１７歳
レベル：測定不能
能力名：聖人（大王の見立てが正しければ）
能力内容：言わずと知れた魔術サイドの人間兵器。１０階建てビルを片手で粉砕する怪力と戦闘機に生身で追いつく機動力、タンカーを頭上から落とされても死なない意味不明な耐久力を有し、４メートルの巨大なチェーンソーと、ガトリングレールガンを武器に戦う。なお、魔術についてしらないため、魔術は現時点では使えない。弱点は、物理攻撃の通じない相手（一方通行など）。また、弱点とも言えないが、彼女よりも高い身体能力を有する相手（レベル５クラスの肉体強化系や、自分より強い聖人）には勝てない。
容姿：ウェーブのかかった白く長い髪と、生気の抜けた真っ赤な瞳が特徴的な大人っぽい美少女。ヨーロッパ系な顔立ちをしている。（大王の見立てはスペイン人）メイド服を着用。
性格：大王の命令に忠実。機械のようなしゃべり方と、思考をしている。大王に言わせれば『幽霊みたいで気持ちが悪い』。だからテレサ（マリオに出てくる幽霊）と名づけられた。

大王がとある研究者からある情報の提供料代わりに貰った、ボディーガード兼メイドロボ。だが、学園都市の技術でも、このレベルの人型ロボットは作れないため、大王は『聖人の少女の記憶を無理やり抜いて人形にした結果』と考えている。大王の仕事の手伝いや、彼の趣味に必要な物品（重火器や、違法薬物）の運搬、彼の趣味の後の事後処理の一部（死体の隠蔽など）、さらには食事などの身の回りの世話もしている。

【ニシン様より・ＩＤ１３２２６８】

名前：東城時人（とうじょうときと）
性別：男
年齢：１６
職業：風紀委員（ジャッジメント）第一七七支部所属
レベル：レベル０（能力というよりは特異体質）
能力名：名前をつけるとしたら身体調律
能力内容：筋力から視力、聴力などの五感挙句は自然治癒力の活性化などの身体に備わってるあらゆるものを任意で上昇させる事が出来る。使用の際には左目が碧く染まる。蹴りでコンクリートを砕いたり、至近距離からの弾丸を回避したりなどが可能となる。がその分身体への負担も大きく長時間の使用や連続での使用は危険。目安として左目から出血→身体が動かなくなり行動不能となる。また左目から症状が現れるため左目が使用不可になり死角にもなる。その為長期戦になればなるほど不利になる。
基本的には上記の体質？能力？と常に持ち歩いている刀（能力を斬る事ができる特殊な刀）を用いた近接戦闘が得意である。
容姿：黒い瞳に程よい長さの黒髪で中肉中背の見た目ごく普通の高

校生。

性格：世話好き、お人好し、家事が好きという主夫特性を持った典型的なお人好しキャラ。滅多にキレる事は無い文キレとかなり怖いらしい。常に周りに気を配っているため状況把握能力も高く特に慌てることは少ない。

【あしゅき様より・ＩＤ１６９４００】

名前：常闇直人（とこやみなおと）

性別：男

レベル：５

能力名：黒之微笑（ダークフェンサー）

能力内容：影や闇を操る能力、本来影や闇を操るだけでは『大能力者』だが、本人の影や闇の印象を変えることで内容を変えることが出来る。応用がかなり利く能力。通常の状態だと切れ味のいい影〈イメージはハガレンのプライド〉だが、マイナスの印象をつけることで圧縮したり電子を操ったり、拒絶したりすることも出来る。しかし、その分光に弱く、日が出ている間は能力を使うことが出来ない。また、日の光を浴びると極端に衰弱する

容姿：男とも女ともとれる

性格：昼間はただの根倉野郎だが、夜になると気が強くなり笑顔が増える。また共通で困っている人を見過ごせず、よく事件に首を突っ込む。外道を許さず、子供に手を出そうものなら病院行き確定である。また裏の人間であり、信条は『殺られる前に殺る』、その通りに奇襲や速攻が得意であり、一瞬で命を奪う。また、ネコ好きで

ある。さらにハーレム持ちである

【雨季様より・ＩＤ７９９７０】

名前：中田雄二（なかたゆうじ）
性別：男
年齢：１８
レベル：３
能力名：見えざる手（マジックハンド）
能力内容：自分の見えている範囲に透明な手を二つまで出現させる能力。手自体は透明な事以外は能力者の手と全く変わらず、更に透明な手が傷付くと能力者の手まで傷が付く。しかしこの能力の最も特異な点は『見えている範囲』に能力を発動できる事である。望遠鏡などで遠くから見た場所に出現させるのはもちろん、リアルタイムで動いているならば映像の先にも透明な手を出現させる事が出来る。防犯カメラだらけの場所は能力者のテリトリーと言っても過言ではない。

容姿：没個性の塊。黒髪黒目に黒ぶちメガネ。高校を卒業して警備会社に入社してからはほぼ常に警備服である。休みの日にもモノクロの服を着ていて、彼だけ色がないように見える。

性格：目立つことを好まず、なるべく人目につかないように行動をする。だから警備会社で監視カメラを眺めつつ、不審者がいればその能力で捕まえるような事をしている。しかし本人としてはそんな性格を直してもっと社交的になりたいようだが、それが直るのは遠い未来になりそうだ。一人称は自分。二人称はあなた。

【ａｓｕｔａ様より・ＩＤ１５７６６５】

名前：永松大王（ながまつおおきみ）
性別：男
年齢：１５歳（高校生）
レベル：４（書類上）
能力名：断頭奔流（ウォーターソウ）
能力内容：水流操作系最強の能力。最大速度マッハ１６で、操作できる重量の限界は５．２ｔ、操作範囲は自身を中心とした半径２５Ｍ、１Ｌの水で軽自動車を持ち上げるかなり強力な能力。さらに、水の状態の変更（固体・液体・気体・プラズマに変更可能だが、プラズマだけはかなりの演算能力が必要で、使うとかなり疲れ、１週間は歩行不能。さらに、体重が３キロ減る）はもちろんゲル状や、ゼリー状にすることも出来、水の純度の操作はもちろん、なんと水の硬度まで操ることが出来る。一方通行や絹旗のような、無意識下での防御が可能（鋼鉄並の硬度の氷を相手の攻撃に合わせ、自動生成する）得意技は自身の通り名である、ウォータカッターの原理で敵を斬りつける断頭奔流。また、純粋を生成できるので、電撃使いに対して滅法強い。

容姿：短い前髪と、長いもみ上げが特徴的な黒髪、琥珀色の瞳の、人懐っこい印象を受けるやや童顔気味な見た目。『面白いこと』をしている時や、情報屋としてはたらいている時は、瞳が切れ長になり、実年齢より年上に見られる。筋肉はほとんどない虚弱な体系。身長１７０ｃｍ、体重５１ｋｇ。

性格：普段は見た目通りの、人懐っこい明るい少年。だが、裏では、自分の退屈を埋めるためにおもしろいことを探し、それの実行と成

就のためなら人の命も、情も、夢も、目的も、何もかも踏みにじるイカれた思想を持っている。一人称は学校生活は『僕』で情報屋モードは『ボク』になる。

『面白いこと』を探し、色々な情報を仕入れている。学園都市において、彼が知らないことはなく、学園都市が出来た理由、つまりは統括理事長の目的も把握しているらしい。情報操作の技量も相当で、『レベル５にランクインすると目立ったことが出来なくなってつまらない』として、自分のレベルを４にしている。つまり本来の実力はレベル５。ハッキングが得意。また、情報獲得のためにスキルアウト、暗部組織、風紀委員、学園統括理事会などにコネがある。必要悪の教会ともつながりがあり、魔術世界についてもそれなりに詳しい。以上の能力を生かし情報屋を営み、『面白いこと』をするための資金や、それに必要なものを得ている。

彼の弱点は極度の運動音痴。『のび太より足が遅い』、『重量上げのバーも持てない』、『ボーリングのアベレージは２』など様々な伝説がある。その弱点を、『皮膚の上に薄い水の膜を張りそれを操作する』ことで、超人的な身体能力に見せることでそれをカバーしている。

所属は長点上機学園で、結構まじめに通っている。

【あしゅき様より・ＩＤ１６９４００】

名前：橋本（はしもと）
性別：男
年齢：？
レベル：４
能力名：死屍累々（ポイズンダウナー）
能力内容：全身の穴という穴から神経性の猛毒を噴き出す。ただし、

猛毒は即死という訳でなく。じわじわと足の神経から汚染していき、最終的には脳に至り死亡する。能力者の周りには毒に汚染されて地面に這いつくばって死んでいる屍が周りに敷き詰められる。まさに死屍累々。しかし、発火能力者に弱く、毒を燃やされてしまっては何もできなくなる。さらに能力者自体に戦闘力はなく、ケンカをしようものなら中学生にも負ける
因みに毒は毎回変わり、抗体は作れない。さらに有色ガスと無色ガスに自由に変えることが出来る

容姿：まさに極悪人、ヤクザとかそんな者ではなく、とにかく極悪人

性格：自己中心的、自分が邪魔だと思えば遠慮なく殺すし、自分が欲しい物、又は人はどんなことをしようとも手に入れようとする。拒めば同じく遠慮なく殺す。口癖は『屍決定』実は可愛いもの好き、あと赤ちゃん好き

【瀬河ナツ様より・ＩＤ１３６８５１】

名前：藤斑秋風（ふじむらあきかぜ）
年齢：１５
性別：男
レベル：３
能力：欠落回路（ショートサーキット）
能力内容：相手の能力を一時的に封じる能力。本人のレベル以下の能力者にはかなり有効だが、レベル４、５には最大一分が限界、その気になれば封じられていても能力が出せる（ただしその場合はかなりの激痛が頭を襲う）、一度使うとしばらくは同じ相手に使えないと微妙な能力。

容姿：金髪（染めてます）に赤い瞳（カラーコンタクト）で背は高め。服装はヤンキーみたいなちょっとガラの悪いファッション。

性格：ぶっきらぼうだが根っこは優しく友達思い。和華を大切に思っているらしく、和華が傷つけられるとブチキレる。どーでもいい補足、喧嘩は滅法強い。普段から怨霊？　をデフォルメにした人形『ノロイー』を持ち歩いている。

【管理人より】

名前：二葉（ふたば）　真雪（まゆき）
性別：男
年齢：１７
レベル：３
能力名：瞬間移動（テレポート）
能力内容：知ってのとおりなので書きやすいかと。ただレベル３なので、自身の転移は出来ない。戦闘スタイルとしては手持ちのものを何でも使っちゃう人。シャーペンでも定規でも彼にとっては武器になる。相手の身体に転移させることができるが人体の中心はどうしても座標がずれるらしい。四肢を最初から狙う人。

容姿：身長１７６センチ。黒髪短髪。毛先は少しはねている。ヘアピン装備。いつもはブレザーの制服を着崩している。文房具一式ＩＮブレザー。

性格：いわゆるクソビッチ。虐められたら虐められたその倍だけボコボコにしたくなるなんていうドＭでドＳなわけのわからない人。

一人称は『俺』。

【ユーシン様より・ＩＤ１７２０３３】

名前：不破　飛鳥　（フワ　アスカ）
性別：女
年齢：１３歳
レベル：２
能力名：身体強化（アドバンスワーク）
能力内容：自身の身体能力を外側から補強する能力。反動を相殺、反射速度や傷の回復速度の高速化、握力、脚力増加など。演算を無意識下で行っているため開発による成長は見込めないが、実戦での上限は未知数。基本は黒いバットケースに入れている木刀を振り回し戦う。

容姿：紫を少し混ぜた黒に絹のような髪質、長身で健康的なスタイルの良さを持っている。服装は動きやすいＴシャツ短パン、制服など。

性格：モデルのような外見だが、内面は子どもっぽく素直で活発な柵川中学の二年生の関西弁少女。一人称はウチ。
活発ではあるが、指示する側ではなく、必ずされる側であり、自分から行動しない受動的な性格でもある。能力の影響で運動神経が優れているが、演算を無意識に行っているらしく、勉強面に応用できないので成績は平均程度。経験値獲得のため、闘いは申し込めば断らない。肉体派と闘いたい人はどうぞ。

【渡様より・ＩＤ６４５３３】

名前：紅渡音也（べにわたりおとや）
性別：男
年齢：１６歳
霊装：血薔薇園（ブラッディーローズ）
美しいフォルムと音色を奏でるバイオリン。
かつてその音色で怒れる人々の負の感情を清め、戦争が無くなった事がある。
しかし、持つものの感情により音色は変わり、負の感情を抱きながら弾くとバイオリンから茨が現れ周りを見境なく血に染めた事によりその名がつけられた。

容姿：茶髪で髪は耳が被るか被らないかぐらいで常にマフラーに見える長いスカーフを巻いており、バイオリンケースを持ち歩いている。

性格：バカで自由気ままで自意識過剰でナンパ癖が酷いが、本気で惚れた女は意地でも守り抜き、どんな事をしてでも助けたいと思う気持ちはバカ正直突っ走る熱血漢な部分がある。
暇さえあれば、花畑でバイオリンを弾いており、バイオリンの腕前は聞くもの全てを虜にするほどうまい。ナンパも、堕ちた女性は少なくは無く、逆に捨てた女性も少なくは無い。
能力は無く、魔術サイドの人間でも無いが学園都市にはただの気まぐれで来た。
高校の面接で突然バイオリンを弾いて、それが面接官の印象に残り合格した破天荒な過去があり、学校では伝説として残っている。
バイオリンは家宝であり肌身離さず持っており、花畑で弾くのは気まぐれ。

夢は教科書に載るほど有名になること。
バイオリンを作る事も出来、質屋に高値で売っている。
好物は無いが、愛する人が作る物なら残さず完食してしまう。
愛する人が近くにいて喧嘩を売られれば調子にのって良いところを見せようとして諦めずに這い上がり、最後は・・・。

【管理人より】

名前：光谷（みつたに）　桜（さくら）
性別：男
年齢：１３
レベル：２
能力名：立体映像（ホログラム）
能力内容：相手に物体を見せるように錯覚させる能力。それだけ。直接的な攻撃力はない。戦闘時はがむしゃらに使って合間を縫ってハンマーを振り回す。そのハンマーも普通の日曜大工用のため大きくもない。

容姿：普通に少年。栗色の髪を短くしている。身長１５３センチであまり高くない。普段はどういうわけだか作業服を着ている。

性格：究極のビビリ。不意打ちされたらとりあえずハンマーを振り回す。怖いことがあるととりあえずハンマーを振り回す。ビビリのお陰か異様に感覚が鋭い。まあまあ書きやすいんじゃないかなあ。
一人称は『僕』。

【管理人より】

名前：ライエ
性別：男
年齢：１６歳
レベル：４
能力名：絶対排斥（レジスタント）
能力内容：物体と物体の間に存在する斥力（物体同士を退け合う力）を強めたり弱めたりする能力。極めて正確に言うと、元々物体と物体同士には斥力が無いのだが、それを生み出す能力。綾季の万有引力（アトラクタ）と対になる能力といってもいいかも。ただこちらの方が若干精度が落ちる（分子レベルでの操作は不可）上、効果範囲が綾季より狭くなる。７０メートルが限界。戦闘時は釘を使用する。斥力という概念がおぼろげなため、能力自体はわりと稀。

容姿：真っ直ぐの金髪に碧眼。例えでいうならガラス細工。中性的な感じ。ハーフらしいけどファミリーネームを明かしていないため定かではない。身長１６８センチに釣り合わない体重。

性格：無関心。とにかく無関心。自分に関係しなければ基本大人しいが、面倒ごとになるととりあえずぶっ潰そうかな、という気持ちになる。（使うかわからないけれども綾季厨設定がありまうわなにするやめ）無意識厨二病。一人称は『俺』。

イラスト展示

絵で参加してくれた方々の絵置き場です。ありがとうございます！
まあ現時点で管理人一人ですが；；

こちらもあ～わ順で並べられています。

ユーシン様より・茨野アゲハ　　ＢＹこなつ（管理人）

＞ｉ３３１２１－２１６１＜

みてみんＵＲＬ→ｈｔｔｐ：／／２１６１．ｍｉｔｅｍｉｎ．ｎｅｔ／ｉ３３１２１／

（サンプルがてら描いたものです。　誰だコレになりました；　申し訳ありませんユーシン様！あとアゲハちゃん！　一応テンペストの綴りはあってる！はず！です！多分！！）

管理人より・竜守綾季／ライエ　　ＢＹこなつ（管理人）

＞ｉ３５６１４－２１６１＜

みてみんＵＲＬ→ｈｔｔｐ：／／２１６１．ｍｉｔｅｍｉｎ．ｎｅｔ／ｉ３５６１４／

（所謂落書きですが…。我が家の綾季ちゃんとライエ君！→のアゲ

ハちゃんとはおっそろしくタッチが違いますが同一人物です。こっちのタッチのが描き慣れてはいますねー。紫大活躍でした）

随時追加予定です。

【サンプル】　細波六月ＶＳ光谷桜（前書き）

サンプルにするため書いたものです。参考になれば幸いです。多分ならないです。

【サンプル】　細波六月ＶＳ光谷桜

肌寒い風。淡く輝く月。擦り寄る黒猫。静かな大公園。冷たいベンチ。湯気のたつホットココアの缶。
それから、

「ぎゃあああああ！！！」

劈く悲鳴。

あたしは放心の先の虚無の世界から無理矢理意識を引っ張り起こし、苛々と声の方を睨んだ。

「ちょっ…！何コレ！何なのコレ！何でここんなに猫多いんだよおおおお目光って怖いんだけどおおおお！！」

愛しのマイフレンズに何を言うか。声の主は情けない悲鳴を続け様にあげながら、こっちに向かって突っ走って来る。背丈はあたし以下、それから肝っ玉のサイズもあたし以下。どういうわけだか作業服を着て、手にはコンビニの袋を提げていた。
そいつはあたしの目の前で急に止まって、今にも泣き出しそうな声色で言う。

「そこの人！助けてくださいここは化け猫の巣窟です！！」
「……」
「……あ」

そして、今度は半泣きの聞き取りにくい声で、

「ぎゃあああああああ！！！猫娘えええええ！！！」
「うっさいなもう猫娘とかどこの鬼太郎だよどうせあたしは猫と戯れるのが好きな根暗だよ！！！」

思わずそう怒鳴った。失礼なことを言われた怒りと、あたしの持つ負のスキルの一つ被害妄想が炸裂する。

「いやあああああああもしかして僕いつの間にやら猫の王国にトリップしてたのおおおお！！？ひいいいいお助けください王女様ああああああ」
「うるさい黙れ耳が痛い！！」
「ひッ！」

泣き喚くプチサイズ肝っ玉（今命名）はあたしに怒鳴られ萎縮した。面倒くさい奴だ。余計にストレスが溜まる。

「…名を名乗れ」
「あ、あの、もしかして変な契約書に使ったりするんじゃあ」
「家に帰りたかったら名乗れって言ってるんだよ変なこと気にしてんじゃないよこのプチサイズ！」
「は、はいぃ！！光谷桜（みつたにさくら）ですぅ！！」

何だ、女々しい名前だな。思ったことは言わない性質なので口には出さない。桜は既に半泣きで硬直していた。対するあたしはベンチで体育座りをしたままである。何だこのシュールな光景は。
あたしたちを包むシュールな雰囲気に耐えられなくなり、あたしは立ち上がった。桜は「ひっ」と怖気づいて後ずさる。立っただけでその反応はビビリすぎだろう。

「…桜はあたしに余計ストレスを与えたわけだけどその辺どう落

とし前つけるよ？」
「はいっ！？落とし前ッ！？」
「そう落とし前」
光景的には脅迫現場だろう。そしてあながち間違いではない。
「ストレス発散させてくれるよねさせてくれないのねえさせてよ」
桜の顔が真っ青に染まった。

＊

この学園都市では、超能力開発なんていうイカれたカリキュラムが存在する。
２３０万人の学生がそのカリキュラムを受けていて、当然あたしも受けたわけだが、その結果得られた能力は実に使い勝手が悪いものだった。
衝撃貯蓄（ダメージカウンター）のレベル１。
レベル０――――無能力者の一個上、である。
まあレベルに関しては文句は無い。カリキュラムを受けた約６割があたしみたいなレベル１やレベル０に分類されるのだから、納得できる。逆に一番上のレベル５は２３０万分の７しか居ないらしいから、何もそんな寂しいランクに入りたくもない。
だが、宿った能力があたしはあまり好きじゃない。

あたしの能力は――――受けたダメージをそっくりそのまま好きなときに放出できる、というものであった。

つまり、一度痛い思いをしないと、満足に能力を行使できないのだ。

お陰であたしの身体には、傷が耐えない。

＊

一目散に逃げ出した桜を、あたしは追っていた。

人から見たらその姿はさしずめ、脱兎とチーターだろう。脚力だけは自信がある。どんどん差を詰めて、思いっきり奴の襟を引っ掴んだ。

「ぐ、えッ！！」

「何で逃げんの」

理由はぶっちゃけわかっているが、それでもなお聞いた。聞いてやらないと可哀想かな、なんて思った。ああでもこういうのって人から嫌われるんだろうな。

「ごめんなさい！！猫娘呼ばわりしてすみませんでした！！だから離してくださいお願いします！！」

「そんなの聞いてない」

逃げ出さないようにがっちりと襟を掴んでやる。桜はじたばたと

暴れるが、襟を掴まれては力づくで抜け出すのは困難だ。さもなくば首が締め付けられる。

「さて――――」

ストレスの捌け口に向けて、あたしは暇な片手を振り上げた。

「…ッ！！」

視界の隅でそれを捉えていた桜の手が何かを握っていた。何だ、それは。どこから出したのか、そんなことを考える暇も無く、それはあたしの腹に勢いをつけて食い込み――――

「がっ！！」

激痛。思わず桜の襟を掴んでいた手を離してしまう。桜はその隙をついて、あたしから距離をとった。ぐらりと揺らいだ上半身を支えるため、あたしは地面に触れる両足に力を入れる。

何だ、何が起きた。

痛む腹を押さえながら、殴ったのであろう桜を睨んだ。

彼の手に握られていたのは、小ぶりなハンマーだった。

「な…」

「…はっ！？あ、え、あの、これは」

荒く呼吸をしていた桜が、我に返って慌しく言葉を探す。生命の危機に瀕して、咄嗟に取り出したハンマーがあたしの腹を殴った――――ということでいいのだろうか。彼の慌て方を見る限り、故意では無さそうだ。演技だというなら話は別だが、桜の究極と言ってい

いビビリが火事場の馬鹿力を引き出したと考えれば辻褄は合う。
まあいい。これで彼に『ハンマーで殴られる痛み』を与えることが出来る。
武器を持たないあたしにとって、この痛みはありがたいものだった。

だんだんと痛みがひいてきた。痣にはなっているだろうが、切り傷よりはマシだ。切り傷はそれこそ大ダメージを与えるチャンスが増えるけれども、その分体力が削られるから。

「…ひゃは、ひゃはははははは」
「え、あの、猫娘（仮）さん…？」
「細波六月（さざなみむつき）」
「さざなみ…さん？」
「よっくもやってくれたなあこのチェリーブロッサムめえええええ！！！」

彼は自業自得という言葉を知っているのだろうか。目には目を、歯には歯を、でも可。

右の利き足で強く地面を蹴る。あたしの脚力では桜とあたしの間は半歩ほどで縮まった。一瞬で目前に迫ったあたしに、彼は目を見開いた。その瞳は驚愕と恐怖が混じったような色で濡れている。
拳は必要ない。触れるだけで能力を行使することが可能なあたしは、右手を彼の腕へ向かわせた。怯んだ桜には叫ぶ暇も無ければ、逃げる暇も無い――――はずだった。

ドスッ、と痛々しい音がして、やはりあたしの痛覚が泣き叫んだ。

桜の肩へ伸びた右手は、彼に触れる前に一瞬停止した。その隙を利用し、また桜に距離を取られる。

さっきのは、見えていた。

恐ろしい反射神経だ、と感嘆しよう。――――桜は、ハンマーをあたしの肩に振り下ろしたのだった。

「…うあ、ああ」

またやってしまった、と言いたげな呻き声が桜から漏れる。呻きたいのはこっちだ。二発目だからと言って、ハンマーに殴られる痛みに慣れるわけでもない。むしろ倍増したかのように錯覚さえする。

「このッ…！」

ハンマー二発分のダメージを受けたあたしの身体には今、ハンマー二発分のダメージを与えるだけのエネルギーが貯蓄されている。一気に放出させることが出来れば、当たり所にもよるが桜のような小柄な人間は気絶させることが可能になった。

だが、それが果たして出来るか。二回目の火事場の馬鹿力が、偶然にしては出来すぎている。

彼がそういう人間なのかはわからないが、無鉄砲に突っ込んでもまたハンマーで殴られるのがオチだろう。

あたしは苦虫を思いっきり噛み潰して、飲み込んでやった。エネルギーと一緒に、ストレスも溜め込んだあたしの身体に、ぐちゃぐちゃの苦虫は大分効いた。

火事場の馬鹿力は、窮地に立たされたときに出るものだと聞いている。

なら、その窮地を崩してやろうじゃないか。

「うぐ…っ、こっ、来ないでください！！」

ハンマーをあたしに見せつけるようにして桜は言うが、気にせずあたしは無表情でじりじりと詰め寄った。二回もハンマーで殴っているのだから脅しにくらいなるだろうと思ったのだろうが、あたし相手になるわけない。あたしが怖いのはストレス、それだけだ。……まあ、嘘だけど。

さっきまでとは違う、焦らすように近づくあたしに、桜の火事場の馬鹿力は完全に出るタイミングを見失ったらしい。飛びかかっても来ないしハンマーを振り回したりもしない。それでもあたしは油断はせずに、ゆっくりと確実に距離を詰める。直線距離にして大体5メートル。

桜は舐るような不穏な圧力に、元々引きつっていた顔をさらに引きつらせた。ここからでも握ったハンマーに力が入っているのがわかる。

そろそろか、とあたしが思った、その瞬間だった。

「わあああああああああッ！！！」

桜の悲鳴と、あたしと桜の間にレンガの壁がそそり立ったのはほぼ同時だった。

「なっ！？」

あたしの行く手を阻むその壁は、それこそ幅は広くない。だが、あたしの思考を中断させるのには十分すぎた。なお続く桜の絶叫が

徐々に遠くなっていくのに気づいて、慌てて壁を潜り抜けて彼を追う。

「わあああああああああ、あッ！！？」

「誰が逃がすか！」

やはりすぐ追いつけたあたしは、今度はかの壁のごとく桜の前に立ちふさがってやった。彼は怯えた表情をしていたが、手に持ったそれは凶器でしかない。しかも桜は立ち止まらず、半ば発狂したように絶叫してハンマーを振りかぶってきた。

「あああああああああ！！」

「っ！」

横殴りに迫ってきたそれは、どう避けるか考えることすらさせてくれないくらい、豪速だった。さっきの壁といい何といい、何なんだこいつは。

避けきれないと悟ったあたしは、作戦を変更して手の平でそれを受け止めることにした。もちろんそれだけでは手の骨が砕けて終わるだろうが、あたしの能力で相殺すれば受け止められるはずだ。

ぱんっ、と乾いた音がして、あたしは右手から伝わる鉄の冷たい感触を噛み締める。上手くいったみたいだ。桜がぽかんと呆気にとられている。あたしはもう一発分残ったエネルギーを叩き込もうと、ハンマーを押さえたまま桜の腹に左手を押し付けた。

思いのほか強くその手は彼の腹にめり込んだ。そしてそのまま、

「うぐっ！！」

放出してやる。

小柄な桜の身体はいとも簡単に吹き飛ばされ、彼は公園の土の上に叩きつけられる。コンクリートよりは受ける衝撃は小さいはずだが、それでも桜は痛々しく呻いた。

「――――さて」

あたしはそう小さく言って、倒れる彼に歩み寄った。

＊

「こんにちは。細波六月さん、だよね？」

長身の美青年と、あたしは対峙していた。場所はいつもの大公園。黒髪の上のシルバーのヘアピンが日光を反射して、あたしの目を眩ませにかかる。

「…何の用」

「いや、この間光谷桜っていうレベル2の能力者がここで暴行にあったって聞いて。その犯人が君だって聞いて、さ」

何だあいつ、レベル2だったのか。結局桜の能力が何だったのかはわからないままになっていた。まあ今となっては聞いてもどうにもならないし、あたしは心底どうでもいい。

「あんたは風紀委員（ジャッジメント）か何か？」

「いいや」

黒髪は即答した。あたしは目を細める。

「…じゃあ何」

「ええ？俺が君に会いたかった理由なんて聞くほどのことじゃないよ。…ただ、衝撃貯蓄（ダメージカウンター）をボッコボコにしてみたくてさ」

桜といい、こいつといい、———あたしといい。

この街はイカれてしまっている。

【サンプル】　細波六月ＶＳ光谷桜（後書き）

（そんな街で、これからどんなことが起こるのだろうか？）

ボッコボコ宣言の彼と細波さんの話は書きません。多分。

【サンプル】とある小路の大気支配（前書き）

オウニンポヤ様より、サンプル小説となります。

【サンプル】とある小路の大気支配

動脈より枝分かれした毛細血管によって人体の隅々まで血液が運ばれるのに似て、大通りより無数に別れた小路を通り生徒たちはここ、学園都市の各地へとその身を運んでゆく。

これはとある小路で起きたこと。

とある小路の大気支配（エアリアル）

＞i３３４９３―２１６１＜

夜、人通りが絶えた裏通り。月の光は聳え立つビルに遮られ、それに代わる街灯は疎らにあるのみ。影の黒さは幾重にも重ねられた罪の数。そこは正しく悪意が支配する空間である。

寮への近道なのであろうか、地へ届かんばかりに長い鮮やかな茶色い髪を揺らし、その少女は暗い小路を歩んでいた。常盤台中学の制服を纏ったその少女は盲いているのか、神と同じ色をした瞳に光はなく、左手に握られた白杖を振り行く手を探っている。

少女の前方に足音、三人分のそれが小路に響く。立ち止まった少女の行く手を塞ぐように足音は動き、そして指呼の距離で停止した。

足音の持ち主は、その顔を獲物を見つけ出した肉食獣のような笑みで歪めていた。彼らはこの小路を本拠として様々な悪事を為す不良少年の集団、いわゆる武装無能力者（スキルアウト）集団である。

「おいおい姉ちゃん、こんな夜道の一人歩きはあぶねぇぜ。それとも誘ってんのかぁ。」

彼女の正面、リーダー格であろうか、三人の中央に位置する金髪の男が下卑た笑いと共に少女へと口を開く。

続けて金髪の右手側より、左耳にピアスをつけた男がニヤニヤと笑みを浮かべながら声を放つ。

「慌てて帰るにゃまだ早えよ。寄り道ぐれぇいいだろぉ。」

少女は男たちが漂わせている危険な雰囲気に怯えているのか、その場より動かないでいる。

「楽しいトコ知ってんだよ。遊びに行こうぜぇ。」

黙り込んだ少女の姿は嗜虐心をそそるものであったのか、残る一人である丸顔の男は楽しげな顔でそう話しかけた。

少女が動きを見せたのはその時であった。軽い溜息と共に肩をすくませ、そして左手の白杖を地面に線を引くように軽く振る。

刹那、三人は何かに足元を打ち払われ、その身を前方へと半回転させて倒れこむ。慌てて立ち上がろうとするが、彼らにできたことは驚愕の声を上げることぐらいであった。動かせるのは僅かに首のみ、彼らの腕が、足が、胴が、何かにより地面へと押さえつけられ微動だに出来ない。

「てめぇ、何しやがッ！？」

得体の知れぬ戒めより逃れようと身を震わせつつ少女へと放たれ

た金髪の罵声は、延髄に何らかの衝撃を受けたのか、頭部を跳ね上げさせられたことで途切れ、そこから続くことはなかった。両側の二人も失神した金髪と同じように一瞬、頭をもたげたかと思うと意識を刈り取られた。

眼前の男たちが突如這いつくばり気を失う、という異常な事態が起こったというのに、少女が驚いた様子はない。それどころか、何の関心も持たぬかのように、この場を立ち去ろうと再び歩み始めた。

三人の横を抜けて進み続ける少女の後方より、軽い、踏み台より跳び下り着地したような足音が小路に木霊した。その音を聞き取った少女が振り返ると、路面に伸びた男たちの向こう側、そこに少女と同じく常盤台中学の制服に身を包み、黒髪をツインテールに纏めた女の子がいた。

「風紀委員（ジャッジメント）ですの！暴行の容疑で・・・と・・・これは・・・・・。」

背筋を伸ばし、袖に留めた腕章を示しつつ凛とした声で放たれた女の子の言葉は、次第に尻すぼみになってゆき、全てが発せられることはなかった。

さもあろう。三人連れのアンチスキルが少女へと絡んでいる場面を監視モニターで確認し、現場の裏路地へと駆けつけてみれば、当の男たちは吐き捨てられたガムのように路面にへばり付いていたのだから。その無様な姿を目にすれば張った気も抜けよう、というものだ。

思わず脱力してしまったとは言え、その女の子も風紀委員（ジャッジメント）として多くの経験を積んだ者、すぐに立ち直ると手際よく倒れている男たちに手錠を掛け拘束していく。

「あらー？そこにいるのは黒にゃんかしらー？」

少女が女の子へと話しかける。この二人は面識が有るようだった。
「風祭先輩！？・・・犬猫ではありませんのでその呼び方は止めていただけませんか？」
風紀委員の女の子、白井黒子は不良男子（スキルアウト）に絡まれていた少女が知人であったことに驚いた様子を見せた。ついで白井は軽く眉をよせて話し掛けてきた少女、風祭涼が使う呼び名が気に入らないらしく、使わないよう求める。
そしてはぐらかされる。
「えー？黒にゃんは黒にゃんでしょー？」
そのような風祭の反応に慣れているのか、白井は本題へと話を進めてゆく。
「それで、これはどういう状況ですの？」
「何にもやってないよー？この人たちが勝手に転んで気を失っただけだよー？」
「ウソですわね。」
風祭の返答を白井は一刀両断に切り捨てる。「状況」を問うているのに「何もやっていない」と答える時点で、「私は何かをやりました」と言っているようなものだ。
そして、風祭にはその「何か」を可能にするだけの能力を持っていた。
「なっ！？もしかして聞く耳なしー？」

そう言う風祭を見る白井の目は、「好き勝手能力を使わずに風紀委員（ジャッジメント）を待て、といつも言っているじゃないですか！」と、雄弁に語っていた。

「＜大気支配（エアリアル）＞たる先輩の能力なら不良（スキルアウト）の二人や三人、気絶させることぐらい簡単ですの。」

＜大気支配（エアリアル）＞、それは学園都市最強の能力者たち（ＬＥＶＥＬ５）の一人、空力操作系能力者の頂点に立つ者へと授けられた尊称である。この少女、風祭涼は大気の王者として君臨する者であった。

「あはは・・・、じゃさよならー？」

これから先に予想される面倒を回避するべく逃げる宣言をする風祭。それを止めようと白井は空間移動（テレポート）の演算を開始するが、一歩遅かった。

風祭の姿が一瞬、歪んだかと思うと溶けるように消失していった。

「じゃあねー？バイバーイー？」

虚空から姿なき風祭の声が小路に響く。残された白井の顔には、「次はお説教だけでは済ましませんの！」という内心のセリフがありありと刻まれていた。

【サンプル】とある小路の大気支配（後書き）

オウニンポヤ様、ありがとうございました。

感想など、お待ちしております。

【サンプル】とある月夜の超進化論（前書き）

ユーシン様より、サンプル小説です。

【サンプル】とある月夜の超進化論

学園都市の十八学区にはトップクラスの教育機関意外にも様々な施設がある。例えば植物園。といってもその施設自体が大学の持ち物なのだが。

明星大学付属植物遺伝機能研究所、という書類上の堅苦しい名前ではお客がこないので、園長の独断で勝手な看板が取り付けられている。もちろん研究施設といっても、観光を主軸になるよう設計されているので外装も内装も見栄えの点では問題ない。

ガラスのドームから見える生い茂った草木を見ればここが何をする所かはある程度推測できる。

こういった管理が難しい場所には専門のスタッフや業者を必要とするが、ここは違う。

すべてが学生達にまかされているのだ。それは園長でも例外ではない。茨野（いばらの）アゲハという少女は十八歳にしてここの管理を任されている園長だ。

彼女は学生でありながら授業を受けることもなく一日ほとんどの時間を徘徊に使っていた。

入り口から入ってすぐにあるカフェから眺めることのできる花畑には様々な色の花が咲き誇り、彼女はちょうど今そこで水やりをしている。

木の幹のような髪色をした茨野の顔立ちは綺麗に整っているが、そこに血の気のない肌の色や生気の無い目つきが加わって、周囲には服屋に並ぶマネキンのような無機質で冷たい印象を与えており、身に着けている真っ黒なワンピースはもはや着せられているように見えてしまうほどだ。酷くいえば、ガラス越しのショールームでじっ

としていても誰も気に留めないかもしれない。
生命力が溢れでるこの空間と対称的な茨野に、初めて来た人間は不気味さを感じ、そこに近寄ろうとしない。
だが、慣れればそんなこともないと言わんばかりに一人の少年が、彼女の背中に声をかけた。
「植物園の年間フリーパスって売れるんですか？」
赤黒いロップイヤーのような髪で、白いカッターに黒いズボンの無個性な制服を着た少年は、草花を見に着たとは思えない、それでいてデリカシーのない台詞を平然と口に出しつつ問題のカードに目をやっている。
「あそこのカフェが見えるだろう？　昼食や放課後にここで時間をつぶしにくる学生用だ」
ゆっくりと振り返り、茨野が真っ白な指を向けた先にはたくさんのパラソルと椅子が並べられている。賑やかというほどではないがそれなりに席は埋まっているようだ。
「最近顔見てなかったんで、ちょっと心配だったんですけど」
「わざわざ訪ねてくれたのか？　心配も何も毎日同じことの繰り返しだ。　巡回、食事、睡眠、それだけだ」
「あんまり充実して聞こえないんでやっぱり心配です。　それで楽しいですか先輩は？」
「結論から言えば、割とな。　お前が来てくれるだけで今日は十分

充実しているよ」

薄く笑みを浮かべる少女の言葉に、表情のなかった顔を少し赤くした少年は気恥ずかしさを誤魔化すように話題を変える。

「そういえば、オレが来たときはいっつもここにいるような気がするんですけど」

「ここの花には色々と思い入れがあるんだよ。　そうだなぁ、お前はパンジーの花言葉を知っているか？」

「さあ？　そーゆータイプの豆知識には全然興味ないんで」

「心の平和、だそうだ」

茨野の目線は少年の方でなく、ネックレスのように首に下げている植物のデザインをあしらった銀の鍵の方だった。
その鍵をみつめる彼女は、どこか笑っているようにも悲しんでいるようにも見える。

「どっかで聞いたような気がするような、しないような」

「私の親友が好きだった言葉だ。　お前の方がよく聞いてそうだが」

「あんまり昔を振り返るのは好きじゃないんですよね」

少年は嫌そうな顔をしつつも彼女の言う親友と同じくであろう人物を思い浮かべてしまう。

会話が途切れたのが気まずいのか、「まあ、元気ならいいんです。

じゃあ仕事があるんで行きますね」と、少年はそそくさ出口を目指して歩く。

とても短い会話だが、彼も彼女も特に不服そうな表情はない。少年はいつもせわしなく動き回っているし、少女にはいつでも時間がある。

簡単な見送りを終えた茨野は来た道をゆっくりと戻り、一番奥の自室を目指し歩を進め始めた。

茨野の自室は観覧できる区画と変わらない広さを誇る。外壁には大量のツタが張り付いて、そのいくつかは秋でもないのに紅葉しているのだが、それは試験的に造り出した植物を混ぜて観察するためだ。部屋の中央にある玉座に似せた岩のようなものと、そこに座らされたマネキンのように、じっと動かない少女は、屋根のガラス越しに差し込む薄い月明かりに照らされている。

「久しぶりの客人だな」

貯水用に外壁の真下に設置された細い円の水路が揺れを感知し進入者の存在を茨野に知らせる。

そしてすぐにボンッという音とともに、防火扉のような分厚い入り口が焼き切られて内に倒れた。

その奥から十人程度の物騒なモノを装備した覆面達が一斉に茨野を取り囲む。部屋の向こうからはキーンという耳障りなかん高い音が

響いてくる。

「茨野アゲハ。　抵抗せずに後ろの扉を開け」

リーダーらしき男が指をさす先には植物園という光景からはどこか浮いている鉄の扉がある。

「対能力者用のジャミングか。　用意がいいな。　どこの部隊だ？」

「その状態ではろくに動けないだろう。　お前はおとなしく開錠の方法を提示するだけでいい」

「その後で殺す、か……なかなか無慈悲な連中だ。　そうやって何人殺してきたんだろうな」

溜息を吐きながらくだらなさそうにしている茨野の顔からは恐怖が感じ取れない。

「そうか、こちら側の危機感が伝わっていないらしいな。　……三秒以内に答えろ」

男は不格好な機関銃の先を茨野に向ける。

「……三！　二！　いっ！　……ちぃ？」

男の叫びはそこで途絶えた。なぜなら、彼は足下から生えた槍のような大木の根に腹部を貫かれたからだ。

男の頭は垂れ下がり、槍のようなものには赤黒い液体が流れている。

「結論から言えば、必要ない。　それと、書類も見ずに能力者とい

うだけで判断したのは迂闊すぎるな」

一瞬状況を遅れて認識した他の覆面達は合図もなく一斉に銃の引き金を引く。

ダンッダンッという大量の発泡音が部屋中に響き渡る。

結果、一つも弾も彼女には届かない。阻んだのは先ほど男を貫いた槍のようなもので茨野が創り出した特別な植物だ。

茨野は背中に植えつけられた接続装置にある九つのうち二つのスロットをその植物に使用している。

一つは地面に潜らせ、もう一つは一度地面まで下がってから根のように別れ、槍のスカートがUの字状に彼女の全身を覆っている。

「ややこしい過程を省くと、私は創る能力者だ。　つまり振るうすべては私が体を動かすことと大差ない」

そこで言葉を切る。そして強く、静かにこう言った。

「お前達の相手をしているのは特殊な武器を持った子供ではない。
　正真正銘の化け物だ」

それが合図だったのか、一斉に地中から槍が飛び出し、反応が遅れた者は先ほどと同じ結果を招いた。

何人かが転がるように回避して発泡を続けても茨野アゲハは座ったまま動かない。

編みこんだようになっている太い根の隙間を狙うには距離があり過ぎるし、この状況で足を止めることは自殺行為だ。

とっさに、部隊の一人が腰に着けていた缶ジュースぐらいの手榴弾からピンを引き抜き、彼女目掛けて投げつけた。

たとえ彼女自身にダメージが入らなくても植物は焼け、間接的に戦闘手段を失うだろうと判断したからだ。
小型といえ、それは人一人をバラバラにするには十分な威力である。
爆発はドガンッという炸裂音とともに周囲を焼き、彼女のいる玉座を抉り飛ばし、周囲に大量の土煙を巻き上げた。

二人の男が彼女の死を確認するため近づくと何か細い蛇のようなものが動くのが見えたが、それの正体が分かった時には男の一人の体中に鞭のようなものが撒き付いていた。
バキバキッと肋骨が折られた音と共にゆっくりと立ち上がった茨野は頑丈な装甲さえ失ったものの体には傷一つない。

ぐらっと揺らめく彼女が袖を振るうと、中から飛び出す触手がもう一人の男の銃を握り潰す。
男は唐突な反撃に硬直してしまった。そして次の行動をとるよりも速く彼女の周囲に針山が築かれた。
残る三人のうち足を止めていた二人もすでに串刺しになっている。

「あと一人か」

その一人は茨野の視界には入っていないが、彼女は別の方法で索敵を開始する。
地中に潜った根には貫く意外にもう一つ役目がある。それは振動を感知することだ。
一本一本が彼女の意思で動かせるので、彼女からすれば簡単な作業だ。

「うぉおおおおおッ！！」

彼女は根で感知するよりも先に背後から絞り上げた絶叫を耳にした。

弾切れしたのか、迫る男は刺殺用と分かる異様なナイフを握っている。

それでも茨野は振り返らず、そこに立ち尽くす。

そして男は見た。彼女のばっくり開いて露出している背中部分、正確には中心の接続装置から急速に柿色の蕾が生まれた光景を。
今までの根や蔓と違い、具体的な使用方法のわからない武器に、男は思わず足を止めてしまう。

そして男の次の判断よりも先に蕾の茎が急激な細胞分裂を行い、花は男の目の前で開花した。
普通の花なら何の意味も持たないだろう。だがその花は違う。大きさは茨野の全身よりも二回り大きいなら全く違う意味になる。
男はその光景を見て、花が開くというよりもっと的確な表現があると素直に思った。
竜の頭が大きく口を開けている。実際には見たことなど無いがおそらくこんなものなのだろうと。
花弁一枚はまるで爬虫類の鱗のようで、内側には大きな刃が三重にびっしりと備わっている。

ガチンッと竜の口が閉じられたのを最後に辺りは静寂な夜に戻った。

砕かれて機材がむき出しになった玉座に腰掛ける茨野は首だけになった竜を眺めている。
あれこそが自身の能力名でもある『テンペスト』だ。破壊力は凄まじいものの、キャパシティーは馬鹿にならない。

百のエネルギーがあるなら、発生だけで五十、十分間の起動で十程度だろうか。あまり割に合わない。
この玉座のようなものは植物園全体とのパイプラインであり繋がったままなら百以上も余裕だがそれでは他がもたないので結局すぐに使い捨てる。

（まあ、キャパの高さが急速な枯化を生み出すから問題はないが、金属は溶かせないからな）

もうすでに水分を失い変色し始めている『テンペスト』は辺りの死体を丸飲みにし、内容物を溶かし栄養にしたものの、後ですぐ土にかえっていくだろう。

（いつからだろうか。　何人殺したかも憶えていない）

静まりかえった中で、一人彼女は先ほど男を侮辱した言葉を思い出す。
人を殺すことは食物連鎖と変わらないと認識している、というよりそう考えることにした。勿論、いつしか自分の番が来ることも承知している。

彼女は親友と約束したのだ。ここの扉を守ってくれと頼まれ、自分はこの植物園という居場所をもらった。
だが彼女はその中身を知らないし、扉を開けたことも無い。そして今日もまた繰り返された殺戮も当初からはあまりにも想定外の事だった。
それでもいい、たとえ親友がいなくなろうと役目を降りる気はない。
ビオラという花はパンジーと誤解されるらしく、正確には別種で花の大きさが違うらしい。

それを誤解した親友はその花言葉の一つをパンジーとともに彼女に送ったのだ。

『信頼』。

（お前は私に、生きる理由をくれた。　たとえこの奥にあるのがどんなにくだらないモノでも、お前との約束は私のすべてだ）

過去に円盤を埋め込んだ時から続いた悲惨な実験の毎日から、救い上げてくれた彼の手のぬくもりと、暖かい言葉の一つ一つを思い返しながら、彼女は瞳を閉じた。

【サンプル】とある月夜の超進化論（後書き）

ユーシン様、ありがとうございました。
感想お待ちしております。

とある暗闇の大気支配　1．Side　―　Mikoto　Misaka（前書

オウニンポヤ様より。
序章ということで、よろしくおねがいします。

とある暗闇の大気支配　1．Side ― Mikoto Misaka

地に在る限り昼より夜へと時が進む。この不変の法則は全てを支配するもの。必ず訪れる夜は闇を含み、それは光を塗り潰し、一色へと染めてゆく。

ここ、学園都市もその例外とはならない。漆黒に沈む街を科学の光でどれほど明るく照らそうとも、全ての闇を破り捨てることなど出来はしない。

そう、このビルの屋上のように、かしこの建物の地下のように、闇は確かに存在する。

＞i34550―2161＜

1．Side ― Mikoto Misaka

とある街角、そこに在るのは白という差し障りのない色を纏い、およそ特徴の無い形を取る、「無個性」の一言で表現可能な建築物。それが面する通りはもう深夜といってよいこの時間帯、人が通る気配などはない。白い建物と道を挟んだ対面のビル、その脇に設けられた街灯が、通る者が絶えた道をビルの下半分と共に明るく、しかし虚しく照らすのみ。

視点を移し、ビルの上方より下方を望む。黒々とした中空を四角に切り取るその空間の境界線、屋上の縁に足を置き佇む少女がいた。

短めの茶髪を後ろで括り、黒いTシャツとクリーム色のショートパンツという活動的な装いの少女。自らが立つビルの道向かい、白い建物を見据える少女の名は、御坂美琴という。

御坂は酷く疲れていた。さもあろう。昼夜問わず、休息も、食事も碌に摂ることなく動き続けていたのだから。普段の健康的で活発なイメージとは対照的に、今、ここにいる御坂は疲れ淀んだ雰囲気を纏っていた。

しかし、御坂の瞳は力強い光を放っている。それは内に秘めた固い意志であろうか、それとも強い怒りであろうか。

「あと二ヶ所。」

ポツリ、と御坂が呟く。それはとある計画に関与し、かつ未だ御坂の襲撃を免れている施設の数。そのうちのひとつが御坂の視線の先に在る建物、名をSプロセッサ社病理解析研究所という。

つい、と黒いキャップを握った手をかざし、御坂はそれを目深に被る。その鍔の下、影に覆われたその表情は先程よりも厳しさを増している。

自らに言い聞かせるように再び呟く。

「今夜中にすべてを終わらせる。」

意を決したのか、御坂は虚空へと足を踏み出す。眼下の標的（けんきゅうじょ）を破壊するべく。

それは『絶対能力進化（イカレた）』計画を止める為に、我が身（シスターズ）の分身達を救う為に。

とある外道の断頭奔流（前書き）

ａｓｕｔａ様よりお預かりしました。アポリオン様のキャラクターとのコラボになります。

とある外道の断頭奔流

「ぜぇ・・・はぁ・・・」
少女と男は逃げていた。
少女は、学園都市の暗部と呼ばれる組織に所属していた高位の能力者である。
男の方も、統括理事長直属部隊『猟犬部隊』に所属する元『警備員』である。
そんな二人は出会い、恋に落ちた。愛し合っているが故にお互いの死が怖かった。結ばれたいと、一緒にいたいと思っていたとしても、学園都市に、統括理事長アレイスター＝クロウリーによって自分達は使い捨てられるのみである。そんな自分達の運命から逃れるために、二人は学園都市を捨てる覚悟をした。愛の逃避行。二人の前には希望しかなかった。なのに・・・・・・・
「何なんだよ！？アレは！？」
男は、少女の手を引き逃げながら叫ぶ。意味が分からなかった。何であんなモノがよりにもよって追いかけてくる？
男の口元だけが見える般若の面で覆い、ビジネススーツに身を包んだ、真っ黒い長髪を靡かせた死神のような男。それが、西洋刀を引き吊りながら追いかけてくるのだ。一目で分かる。アレは確実に危険だ。剣なんて持っているのだから、危険というのも当たり前かもしれない。だが、それ以上に纏っている雰囲気が危険過ぎた。暗部に所属する人間なら誰でも分かる、人を簡単に、躊躇いもなく殺せる人間の、独特な殺意。追いかけてくる死神のような男はそれを持っていたのだ。
あれに追いつかれてはいけない。それだけを考えながら、男は少女の手を引いて逃げる。だが、運命とは無情かな。路地裏に逃げた二人は、死神のような男にあえなく追い詰められた。死神は、迫る。命を刈り取る武器を、カタカタという音を立てながら引きづって、

ゆらりゆらりと、陽炎のように。
男は少女を自分の後ろに隠しつつも、
「く、くるなぁ！！」
恐怖のあまり銃を構える。『星花火（スターマイン）』と呼ばれる学園都市製のハンドガン。まだ暗部でしか出回っていない、未だ実験段階の、詳しい原理が男には全く理解不能な発明品。分かることは只一つ。これは、人を一発で血と肉の飛沫に変えられるということだ。
「ちょっとでも動いてみろ！！こ、こ、こいつをおまえにぶち込むぞ」
男は銃を構えて、目の前の死神に脅しをかける。だが、止まらない。死神は、一心不乱に、ただただ自分たちに迫ってくる。
「ひぃ！？」
男は、自分の想い人の前だということ等すっかり忘れ、情けない悲鳴を上げながら引き金を引いた。
バンッ！！という乾いた音が鳴り響く。銃弾は、真っ直ぐに死神のような男へと向かう。銃弾は死神の命を摘み取りにいく。しかし、
「フン！！」
死神は、それを蚊でもはたき落とすかのように、軽く叩き斬った。まるで鈍器を叩きつけるかのようなその動きは、決して剣術などと言ったスマートなものではなかった。言うならばそれは暴行。それは人殺し。乱暴で粗暴な、狂った殺人者の挙動であった。そんなことを考える間もなく、
「イライラさせるなァ！！」
男に刃が叩き付けられた。一閃する白刃は、男の右腕を斬り落とす。
「ギャァァァァ！！」
男は痛みのあまりにうずくまり、絶叫した。男は思った。このままでは確実に殺されると。その予想通り、死神は男にとどめを刺さんとして西洋刀を振り上げた。だが、その瞬間
「お前、何のつもりだ？」
死神は不意に動きを止め、尋ねた。今まで男の後ろに隠れていただ

けだった少女が両手を広げ立ちはだかった。
「モヨコ！！」
男は少女の名前を叫んだ。モヨコと呼ばれた少女は男の方を振り返って、
「平気だよ、しげる。アナタにだけは手出しさせないから」
と言って微笑んだ。
「手出しさせないって・・・やめろよ・・・お前、戦闘系の能力者じゃないだろ・・・」
男、四季崎樹（しきざきしげる）は、少女、倉科モヨコの死という未来がはっきり見えてしまい弱弱しく呟く。倉科モヨコの能力はレベル４記憶探求（メモリートラベル）。相手の体の一部に触れ、記憶を選択して擬似体験する能力である。希少性が高い能力ながらも、戦闘能力は全くない。暗部組織に居た頃も、回される任務の殆どが諜報の類であった。それに相対するビジネススーツの男。何かの能力を使っていたのか、元々の身体能力かは不明だが、少なくとも銃弾よりは素早く動いていた。刀なんて持ってることからも分かる通り、明らかに戦闘系である。勝負は初めから明白であった。だが、
「大丈夫。絶対大丈夫だから」
少女はそれでも決して逃げようとはしない。恐怖に震えながらも、大切な人の為に。
「さっさとどいてくれないか？俺は可愛い女の子の顔面を破壊したくないんだ」
西洋刀を、モヨコののど元に突きつけながら男は吐き捨てた。だが、
「やってもいい。けど、しげるには指一本触れさせない。死んだって、アナタを呪い殺してでも止めるから」
モヨコはそう言って死神の男を、凍てつくような眼光で睨む。その瞳には恐怖が映りながらも、それでいて力強かった。本気で呪い殺す気さえ伺えた。それを悟ると死神は逆上、
「ァぁあはははは！」
・・・するどころか笑い出した。その光景に少女は呆然とし、男は

痛みさえ忘れそうなほど驚いた。
「ハァ・・・面倒な」
打って変わり、死神は億劫そうに首をコキコキと鳴らした。いよいよもってモヨコは思考がついていかなくなった。地面に蹲る樹も同じだ。
「男はともかくお前はいいや。助けてやろう」
死神は面を食らっているモヨコにそう言った。
「私だけって…しげるはどうするの！？」
モヨコの言葉に、
「知らんな。どのみち俺が殺さなくても別の誰かが殺るだろうよ」
素っ気なく死神は返す。
「蚊がいるとイライラして殺したくなる。つまりはそういうことだ」
非人道的な、それすらも超えて化物じみた考えだった。そう語った死神は、
「・・・・・・行ってよし」
と言ってモヨコと樹に対して西洋刀を上段で構える。その行動は、
「三度は言わん。行ってよし」
と、自分に伝えているのだとモヨコは思った。だが、それを分かっていながら少女は、
「私はここを絶対に退かない」
と力強くそう言った。大切な人を見捨てるという選択肢なんて、考えられるワケがなかった。死神はモヨコの決意を受け取ると、はぁ・・・と溜め息を吐き、剣を振り下ろそうとした。その時、
「ま・・・待て・・・・・・」
地面に崩れ落ちていた樹が、斬られた腕を押さえながら、立ち上がった。その様子に、死神は動きを止め、少女は目を見開き驚愕する。
「なんだ？」
死神は尋ねた。すると樹は、
「お前・・・・・・モヨコがもしここで逃げれば・・・・・・絶対手出ししないんだな？」

と問うた。
「見ていてイライラするバカップルならともかく、流石に殺せんわ」
死神はあっさりと答えた。
「それに、さっきも言ったが、可愛い子は斬りたくない」
と、付け足す。死神の口調は飄々としていたが、嘘は無さそうだった。樹はそれを聞くと、
「そうか・・・・・・良かった・・・・・・」
そう言って安堵の表情を浮かべた。
「何・・・・・・言ってるの？」
モヨコはその表情を見るなり、樹にそう尋ねていた。
「まさか、私だけ助けて自分は死ぬとか、そんなこと言わないよね？」
嘘だと、そんなことはないと言ってほしかった。しかし、少女の思いは簡単に打ち砕かれる。
「そうだ」
樹はたった一言そう言った。何で？どうして？そんなモヨコの気持ちを察し、
「俺はモヨコに生きていて欲しい。そういう選択をして欲しい」
と自分の思いを伝えた。好意という気持ちから発生する、自己犠牲に過ぎないその気持ちを。
「もし俺と一緒に死ぬなんて言うなら、俺はモヨコ、君を嫌いになる」
その思いはあまりにも強く、少女にとって残酷な一言に結びついた。モヨコは絶望した。樹の嫌いになるという一言はポーズではなかった。本気で、死ぬその瞬間に自分との愛を忘れると、冷た過ぎる表情は伝えていた。死神から逃げきって二人とも生きるなんて選択肢は最初から消え失せている。つまり選択肢は二人とも死ぬか、自分だけ生きるか。樹と心中を考えれば、樹は自分を嫌いなまま死んでしまう。かと言って、樹を見捨て逃げる選択なんて出来ない。少女は、死神がしびれを切らしかけたその時、選択した。

「グァァァァァ！！」
後方から響く樹の断末魔を振り払いながら、モヨコは必死に走った。少女は、死神から逃げるという選択肢を取った。樹の気持ちに答えたかったのかもしれない。自分を好きなまま、樹に死んでもらいたかったのかもしれない。ただ単に、最後の最後で死神が怖くなったのかもしれない。兎に角少女は、自分だけが生きる道を選んだ。少女は走って、走って、走って・・・・・・そうして幻想を殺す少年の物語が始まった鉄橋で、恋という名の物語が終わってしまった少女は全てを消失して立ち尽くした。
「・・・・・・なんで私には力が無いんだ」
少女は自分の無力を呪った。能力者の街学園都市。様々な能力が０～５までのレベルに分けられている。そんな街の中にいて、何故自分は戦闘系の能力者でないのか？大気の支配者と呼ばれる盲目の少女のように、引力を統べる争い嫌いの少女のように、感情の無い完全な空間移動能力者のように、最低最悪最強と呼ばれるスキルアウトの長のように、自分は何故超能力者（レベル５）ではないのか？
「・・・・・・なんでしげるが死ななきゃいけないの？」
ふとした瞬間、出会った年上の男。出会った瞬間に二人は惹かれあい、最初はお互いに暗部の人間だと知らず、知ったらきっと自分を愛してくれなくなると思っていた。だが、樹は変わらずに自分を愛してくれた。自分にとって、間違いなく運命の人だったのに・・・・・・
「・・・・・・どうすればいいの？」
少女は誰かに答えをこうようには呟く。
「・・・・・・しげるがいない世界なんて耐えられないよ」

少女は人知れず涙を流した。すると、どこからか声が聞こえた。
「死ねばいいんだよ」
と。妙に澄んだ、純白な少年の声だった。
「誰！？どこにいるの！？」
モヨコは辺りを探すが姿は見えなかった。そんなモヨコに、
「ここだよ」
と上から声をかけられた。モヨコがそちらを見上げると、ソイツはそこに存在していた。月を背に橋のアーチ部分に腰掛けたその少年。長点上機学園という、学園都市の名門校のブレザーの下に、ファーフードの真っ赤なパーカーを着た黒髪の少年だった。切れ長の瞳と妙に大人びたである。月を背負っているその姿が似合い過ぎる程に似合い、そこはかとない不気味さを漂わせていた。その少年は、
「√？５点」
と唐突に言い出した。少年の言葉の意味をイマイチ理解出来なかったようできょとんとした表情をしていた。少年はハァと、溜め息をつき、
「君と四季崎くんの純愛ごっこに対する評価だよ」
と言った。
「ボクとしてはさ、相手の命を差し出して自分だけが生き残ろうとする、そういう人としての穢れた部分ってのを見たかったんだ。それなのに君達ときたら、お互いのことを庇いあってさ」
さもつまらなさそうに、侮蔑を含めて少年はモヨコに語る。
「いらないんだよ、そういうの。純愛なら俄然、『君に届け』とか『花より男子』の方が上なんだから。ボクはそっちで間に合ってるんだよ」
少年の言葉は、罵詈雑言とかそういうレベルのものではなかった。モヨコが今まで生きる意味としてきた恋愛に対する全面否定である。ギリギリと歯軋りするモヨコの表情を見て少年は笑顔になり、
「さらに言うならさ、『お互いが死にそうな環境に置かれてるから駆け落ちする』？全くもって意味が分からないね。世の中にはもっ

と苦しい状況に置かれても、それでも愛し合ってる人達がいるんだ。
その人達に対して、君達の行動は、侮辱に価するよ」
と、まともで一見筋の通った意見の中に侮蔑を込めて語った。
「だから√－５点だ。実数で表すことすら厚かましいんだよ。君達の行動はさ。ていうか、虚数で表すにしても過大評価だが。兎に角、ボクをあまりガッカリさせないで貰いたいな」
少年はそう言いながら、軽快な動きで立ち上がり、
「まったく。生体観測の為に『滞空回線（アンダーライン）』と携帯を無理矢理接続したっていうのに。観察対象の片方は、ポンコツを超えたジャンクときたよ」
と、肩を上げ、お手上げと言わんばかりの手振りをした。そして、少年は
「まぁ、もう一方は期待以上のものを見せてくれたからこの観察は成功としておこう」
と言ってほくそ笑んだ。そんな少年の言動に、モヨコは怒りを露わにして、
「ふざけるな！！さっきからなんなの！？あなたは！？」
と叫んだ。すると少年は橋のアーチから、まるでそよ風に揺れる木の葉の如く、フワリと少女の目の前に降りてきた。風を操る能力でも持っていたのか？はたまた念動力かなにかか？兎に角少年は、少女倉科モヨコの前に相対した。そうして、
「何って、ボクはただ趣味を楽しもうとしたものの満足度が５割にしか到達しなかったから、少しガッカリしてるだけだが？」
と、至極真面目な顔で答えた。そして、モヨコが何かを言い出す前に、
「そういうことを聞いているのでなくて、ボクの名を尋ねているのなら」
と話し出す。
「ネットでのハンドルネームは『月桂冠（ワ）』。裏社会での通称は『非無知者（イズマン）』。魔術と呼ばれる非科学世界（オカルト）での名はｓｃｉｏ０５０。そ

して―」
少年はモヨコが、今にも噛みつきそうな獅子のように凶暴な表情になっているのを楽しみながら、
「本名は永松大王（ながまつおおきみ）。情報屋をやっている、しがない能力者だよ」
と言った。その瞬間少女のくすぶっていた怒りは臨界点に達し爆発した。モヨコは、
「ふざけるな！！」
と、激昂して情報屋を自ら名乗る少年永松大王に、拳を握りこんで殴りかかった。大王はそんな様子を他人事のように眺め微動だにしなかった。普通なら拳は、大王の頬骨を抉っていた筈だった。少女の一撃とは言えども、大王は細身で筋肉が無さそうな虚弱な体系であり、大王にとっては致命傷にも成りうる攻撃だった。しかし、
「・・・・・・っあ！！」
モヨコの方が逆に呻き声を上げていた。少女の拳は、大王ではなく彼と自分の間に突如として現れた氷の壁に阻まれたのだ。苦悶を浮かべたモヨコの表情が、壁の硬さを物語っていた。
「言い忘れてたけど、ボクは身に降りかかる外界からの干渉に対して、無意識下の防御が可能だから、そこのとこ悪しからず」
大王は人を食ったような物言いをする。少女はそんな大王を敵意を持って睨み付けた。が、
「あ・・・れ・・・？」
視界がどんどん大王から、下へ下へと遠ざかった。そして顔が地面にぶつかった。顔に激痛が走り、口の周りが真っ赤に染まった。そして、顔の激痛の後に、
「嫌ァァァァァ！！」
それ以上の形容し難い痛みが襲いかかった。
足が、足が、足が―痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い―
思考の中はそれだけで埋められていった。分からなかった。いつ斬られたのだろう？
―私はいつ両足を斬られたんだ？

太股から先が切断されていた。少女はパニックになり、痛みのあまりに地面にのた打ち回った。だが、そんな状況下であろうとも情報屋の少年は至って冷ややかに、
「これも言い忘れてたんだけどさ」
と、話し始める。
「ボクの本名って裏の人間にとっては殺し名と同義語だから。今決めたけど」
そう言いながら、永松は少女を見下すように嘲笑う。そして、少女が自分に対して呪い殺すような視線を向けた瞬間、
グサッ！！
と、氷の棘がモヨコの顎を貫いた。
「うん。自分の本名を殺し名にするのはもうやめよう。自己紹介が不便になる」
大王は、勝手にそう自己完結し、
「そう思うだろ？岩見祥吾くん？」
と自分の視線の先にいる男に同意を求めた。そこには、先ほど倉科モヨコの思い人を殺した仮面の死神が刀をぶら下げて立っていた。
「ーーー極めてどうでもいいな」
岩見祥吾と呼ばれた死神の男はそう吐き捨てる。
「そんなことより、どうして殺した？」
岩見祥吾は尋ねる。すると、大王は祥吾の言葉にクスリと笑い、
「本当に君は人に対して『愛する』か『殺す』か『無関心』かしか行動を選べないようだね。今の言動で大体分かった」
と言って
「君はこの娘を『愛する』という選択肢を取ったワケだね」
と悟ったように語った。
「そして彼女の恋人である四季崎くんには『殺す』という選択肢を取った。全く君は本当に恐ろしいよ。故に面白いけど」
大王の物言いに、
「さっさと答えろ」

と祥吾は苛立ち始める。
「あぁ。そうだったね」
大王はワザとらしくそう言って、
「まぁ、一言で言えばボクは合理主義でね。いらなくなったものは邪魔だから、極力排除したいのさ」
と常軌を逸した考えをさも当然のことのように語った。その発言を聞いた瞬間、死神は西洋刀を引き抜こうとした。しかし、
「む？」
西洋刀は抜けなかった。西洋刀の鍔の部分に水が巻き付いて、いくら力を入れても抜けないのだ。
「言わせて貰うが、ここでボクに刃を向けるのは不正解だよ。君はボクに聞きたいことがあるんだろう？」
彼は岩見祥吾にそう、諭すように言った。苛立ちが募り始めていた祥吾だったが、大王の言い分は的を射ていた。そのために彼はあの二人を、さしてイライラもしていないのに殺したのだから。
「なら言え。すぐ言え。今言え。お前の顔面を早く破壊したいんだ」
祥吾が刀から手を外し、面倒くさそうに、だが苛立ちながら言った。
「君の中に偏在するフラストレーションを消す方法だっけか？連続殺人鬼の岩見祥吾くん？」
大王は分かりきっていながらも、敢えて尋ねた。
「岩見祥吾。君がボクのところを訪れた時は驚いたよ。全国指名手配中の有名人が学園都市に潜伏していたとは知っていたがまさかボクにあんな事を頼むとは思わなかったからね」
大王は大袈裟に手振りをしながら言った。
「まぁ、君にあんな過去があれば当然かもしないが」
と大王は同情するかのように語る。
「お前のような奴に同情される覚えはないな」
祥吾は吐き捨てる。
「君の過去を色々と調べたり、記憶を探る能力者を雇って色々と調べたからね。そこから君のことは大抵予想出来る」

しかし、大王は語ることを止めない。
「岩見祥吾。２０年前に放火魔により家族と死別。１２歳の頃、とある人物と出会い西洋刀とビジネススーツと仮面の三点セットを手に入れその放火魔を殺害。それ以来、自分のフラストレーションの赴くがままに人を殺し、いつの間にやら全国指名手配の犯罪者になっていた。大体こんな感じだよね？君の過去って」
「流石は自称『情報屋』だな」
自分の過去をさも壮大そうに語る大王に対し、祥吾は賞賛し、
「だがさっさと言え。今すぐお前の顔面を破壊したいと言っているだろ？」
と自分の聞きたいことを答えるようにいった。
「あまり急かすな。君の聞きたいことへの『回答』だからさ」
大王はそう言って、さらに語り続ける。
「君の人への接し方って、ボクの仮説が正しければ１００％、２０年前の放火が原因となっているんだよね。君が人を『愛する』のは、家族を失い愛に飢えているからだし、放火によってフラストレーションが溜まり『殺す』という選択肢を取るようになり、放火の後に全てに対して『無関心』だった名残で今でもその選択肢が存在するわけだ」
長々とした台詞を殆ど一息で言う。そして、
「だったら君のフラストレーション、消すなんてお断りだね」
と軽い調子で大王は語った。
・・・・・・・・・・・・・・・イラッ。
祥吾は青筋を浮かばせる。
「君のフラストレーション、間違いなく今の君の人格形成に一役買ってるよ。だったら消してしまうなんて勿体ない」
大王は祥吾の反応を楽しみながらそう言って
「ボクは『死神』としての君に『面白さ』を感じているんだからさ。消すなんて有り得ないよ」
と大王は祥吾を馬鹿にしたように、嘲笑うかのように嬉しそうに語

る。祥吾のピリピリとした殺気を感じると、さらに
「言っとくけど君のフラストレーションを消せないわけじゃないから。学園都市には感情を操る能力者なんてのも沢山いるし、ボクはそういうとこにもコネがあるからさ。ここ重要ね」
と明らかな侮蔑を込めて語った。その瞬間、
「もういいや。殺す」
祥吾のフラストレーションが頂点に達した。
「お前の顔面を破壊する！」
と、祥吾は宣言し、かと思えば祥吾の姿がいきなりその場から消失した。もしこの場に、他に人間がいたならば錯乱しかねなかっただろう。祥吾はいつの間にか大王の懐に入り西洋刀で大王の首をなぎにいき、その西洋刀を大王が氷柱のようなものを手に持ち、それを防いでいる状態が形成されていた。大王は氷柱の剣に罅が入っていることに冷や汗をかきながら、
「ねぇ」
と祥吾に話かける。
「さっさとお前を斬りたいんだが・・・なんだ？」
と祥吾は西洋刀にさらに力を込めながら尋ねた。大王も氷柱の剣に力を込めながら、
「ボクがさっき放った『断頭奔流（ウォーターソウ）』、いくつあったと思う？」
と聞いた。
「２１だな」
祥吾は素っ気なく答える。
「ボクの『断頭奔流』、マッハ１６で水を動かして放ってるんだけどさ、それをそんなにかわすなんてさ、どういうことだよ？」
大王は尋ねる。
「しかもさ、ボクは君が刀を抜けないように水でおさえてた筈なんだけどなんで君はこうして抜いてるんだよ？」
皮肉混じりの大王の言葉に祥吾は何も語らない。
「ていうか、ボクの鋼鉄より硬い氷の防御を力ずくで破った挙げ句

に、同じ硬さの氷の剣を破るなんてさ。君は一体どういう腕力をしているんだい？」
大王がそう尋ねた瞬間、
「お得意の情報網で調べれば？」
と祥吾が口を開いた。そうして、
「イライラすんだよ・・・お前を見てると」
祥吾は明らかな敵意を持って言い放つ。そして刀を一旦引いて、突きを大王に向けて放とうとするが、
「面倒な能力だ」
いきなり辺りに３０ｃｍ先すら見えない程の濃霧が発生した。
「やめてくれ。岩見祥吾くん・・・・・面倒だからショウちゃんで良いかな？」
とどこからか、ふざけた調子の情報屋の声が響いた。しかも先ほどの場所にはいない。祥吾が辺りを探すと、
「無駄だよ。この霧の中じゃボクを探すなんて不可能だから」
と語る。尤も、大王にも祥吾の姿は見えておらず、自分の姿をさがしていると当てずっぽうで語っているだけなのだが。
「いやぁ。君の戦闘スタイル、予想通り近距離型だねぇ。ボクの近距離戦闘用の裏技だけじゃ、いつかボロが出てくるし、自動演算による防御も通じそうにない。よって逃げさせて貰うよ」
霧の中から語りかける大王に、
「死ぬがいい」
と祥吾は言った。
「そう言うな。ボクだって君と戦いながら、観察を楽しみたいと思ってるけど」
霧から聞こえる祥吾の声はそう語り、
「今は他にも楽しみがある。ここでボクが死ぬのもキミが死ぬのも惜しいからさ」
と言って、大王は笑った。霧の所為で全く分からないが、確実に笑ったと祥吾は思った。その瞬間霧が晴れ薄気味の悪い情報屋の少年

はそこから、最初からそこにはいなかったかのように、忽然と姿を消した。それを確認すると祥吾は沸々と湧き上がる憤怒のままに、
「チッ・・・次に会った時は今度こそーーーお前の顔面を破壊する」
夜の学園都市の中でそう誓った。

「予想通り、いや予想以上だ」
大王は夜の学園都市をピーターパンのように空を舞いながら、岩見祥吾をそう評価した。
永松大王は決して、水の能力と、氷の能力と、念動力を有する多重能力者ではない。彼は『水』に関することなら、状態変化も、運動も、硬度も、純度も操れる万能な水の能力者であるだけなのだ。氷と水の両方を操れるのもその為であり、先ほどの霧も空気中の水の操作で作り出したのだ。そして、今こうして空を飛んでいるのも普段から、弱点である運動音痴をカバーするために表皮の上に纏っている『水の鎧』、能力によって体をあたかも操り人形のように操作し聖人並みの運動力を誇っているように見せる為の『裏技』を操り、空を飛んでいるだけなのだ。
「盲目の『大気支配（エアリアル）』、感情の無い『完全移動（パーフェクトテレポート）』、逃げの『万有引力（クタ）』、スキルアウト『圧殺空間（プレッシャースペース）』、この街はいくらでもボクを楽しませてくれる！」
心を躍らせながら少年は空を舞い、とあるビルの上に降り立った。
「これだから好きなんだ！！学園都市が！！世界ってヤツが！！」
そう興奮しながら叫ぶ。そうして、
「だからさ、やり過ぎるなよ。君の計画もボクを楽しませてくれるが、もし世界を殺すっていうならさ」

と言って自分の目線の先にあるビルを、より正確にはそこに住まう住人を冷たい瞳で睨んだ。
「君の幻想、跡形もなくぶち殺すよ？」
情報屋はそう宣戦布告する。
この街の創設者であり、最も歪んだ存在、『アレイスター＝クロウリー』に対して―

とある外道の断頭奔流（後書き）

感想など、お待ちしております。

とある迷子の万有引力（前書き）

管理人より、ａｓｕｔａ様のキャラである永松大王君をお借りしました。

とある迷子の万有引力

「えーっと……」

彼女――竜守綾季の視界を埋め尽くすのは、ひたすら人、人、人。

今日は休日。この第七学区はショッピングと称して外へ繰り出してきた人々で犇めいていた。

人々は皆、休日を有意義に過ごそうと同じようなことを考えてここに来たに違いない。そしてそれは、竜守とて例外ではなかった。

だが、今の彼女のこの状況は何か。

この状況と言うのは、自分の現在地を把握できず、さらに付き添いで来てくれた『彼』をも見失う――そんな状況である。

「これって……迷子？」

―とある迷子の万有引力―

「…と、とりあえずっ」

兎にも角にも、連絡をしなければ始まらない。そう思い立って、竜守は慌てて携帯電話を取り出そうとショートパンツのポケットに手を突っ込んだ。しかし、――まあ展開としては当然、そこに携帯電話の感触は無い。

「あれ？　……お、落とした？」

竜守としては顔も真っ青である。竜守はやっと事態の深刻さを理解し、そして、

「どーしよっ！？　うわあ怒られる、怒られる以前に二度と巡り会えなくなる、もうなってる、うわあああん！！」

――パニックに陥った。

道の真ん中で小さなポニーテールを振り乱し喚く少女に、道を行く人々は当然彼女を怪訝な目で見る。だがそんな視線に気づかないまま、竜守の思考はフルスロットルであらゆる選択肢を右往左往し、やがて一つの場所へ不時着した。

「とりあえず、探さないとっ！…ふにゃっ！？」

弾かれたように竜守は駆け出そうとした。が、それは呆気なく阻まれる。

どんっ、と何かに衝突したのだ。

「……大丈夫？」

やんわりとした声色で、その何かは竜守に声をかけた。竜守は何が起きたのか、しばらくポカンと呆けていたが、やがて状況が掴めると素早く『何か』から一歩離れた。

「ごめんなさい！　あの、言い訳をいたしますと、綾季はわざとじゃなくて、急いで探さないといけないひとがいて、それであのパニックになって周りが見えなくなってとりあえずごめんなさい！」

深く頭を下げて、竜守は謝罪する。その謝罪の言葉は早口な上

に大音量で、道行く人々はやはり怪訝以下略。相手は困ったように笑った。

「僕は大丈夫だから、顔上げてよ」

そう言われておずおずと顔を上げる竜守。そこに居たのは、長身で細身の少年だった。着ている制服は、竜守もどこかで見たことがある。

その人懐っこい笑顔には好印象を受けるが、そのシルエットはどうにも細すぎるような気もする。なかなかの勢いでぶつかって、彼が押し負けなかったのが不思議なくらいだ。

簡単にぽっきり折れてしまいそうなその少年は、どことなく硝子細工のような『彼』に似ているような気がした。そして再び今が由々しき事態であることを思い出し、竜守は慌てふためく。

「あの！　ほんとにすみませんでしたっ！　じゃあ綾季は急ぐのでっ！」

「え、あ、ちょっと待って」

「はいっ！？」

改めて駆け出そうとした竜守を、少年は呼び止めた。事態の深刻さ故半泣き状態の竜守だが、そんな彼女の心情を少年が知る由もない。少年はおもむろに口を開いた。

「――綾季って言った？」

何を言っているのか、この少年は。

竜守は猫のような大きな目をぱちくりと瞬きさせると、「はい？」と聞き返した。

「だから……自分のこと、綾季って言った？」
「あ、まあ、はい……」
「上は？　苗字」
「えと、竜守、ですけ…あ、」

見ず知らずの他人に名乗ってはいけない、と『彼』に言われていたことを今更思い出して、竜守は自分の口を手で覆った。また怒られる理由が一つ増える。
だがやはり遅い。少年は目つきを変えて、竜守に詰め寄った。

「竜守綾季ちゃん、でいいんだよね？」
「え、いや、あの」
「人探ししてるの？」
「まっ、まあ、はい……」
「迷子？」
「迷子じゃないっ！！」

反射的に否定してしまった。今までと違う反応に、少年は一瞬キョトンとしたようだったが、すぐにその表情を愉快そうに変える。

「もしよかったらなんだけどさ、その人探し手伝ってあげるよ」
「っ、ほんとっ！？」

思わぬところから救いの手、と言ったところか。竜守は案の定それに食いついた。少年はにこにこと機嫌の良さそうに頷く。

「どうせボクも暇だしね。手伝うよ」

知らない人には付いていくな、と小学生が受けるような指導を日頃から聞いている竜守だったが（言わずもかなそう言ったのは『

彼』である）、今の状況とその忠告を秤にかけるとこれまた案の定、秤は前者に傾いた。忠告なんかは遠い彼方に吹き飛ばして、竜守は少年の手を掴んで言う。

「ありがとうっ！　すっごくありがとう！」

「どういたしまして。ボクは永松大王（ながまつおおきみ）。探してる人が見つかるまで、よろしく」

＊

竜守綾季という少女について。

まず年齢は十四歳だが、身長は１４８センチと小さい。さらに無邪気で大きな瞳も手伝って、実年齢より幼く見える。本人もそれを少し気にしているようではあるが、愛くるしい見た目のお陰で周りから好かれている節があるので明言はしていない。

そして中身も、これまた幼稚というか、純粋である。

彼女に嘘をつけば、まずバレることはないと言われる。疑うことを知らないのだ。単純に馬鹿だからともとれるが、どちらにしろ純粋だ。

と、まあこのように、竜守綾季という少女は何処かずれているところがある。それは今に始まったことではない。

だが、明らかにずれすぎているところが他にもある。

この学園都市では、超能力開発という少年漫画よろしくなカリキュラムが存在している。学園都市内の全ての学生が、その開発を受けそれぞれ異能の力を手にしているのだ。中にはそれが発現しな

い者も居るようではあるが、全くの無能というのはそう居ない。皆その強度に差はあれど、何かしらの力を手に入れている。

しかしその中で、全く異能の力を持たない無能力者以上に、稀な存在があった。

超能力者――レベル５。たった一人で軍隊に匹敵する力を持つと言われている、正真正銘の化け物がそれである。

２３０万人の学生が学園都市には在籍するが、レベル５はたったの七人しか居ない。それほどまでに彼らはイレギュラーだった。

話を戻して、単刀直入に本命を撃ち抜こう。

――竜守綾季は、まさにそのレベル５であった。

――そしてそれを、永松大王が知らないわけがなかった。

＊

「え、えと、大王…？」

『彼』を探して第七学区を練り歩いていた竜守と永松は、いつの間にか学区の外れまで来ていた。

人通りはさっきまでの盛況ぶりが嘘のように皆無になっている。ひたすら学生寮ばかりが陳列しているが、その学生が居ないだけで何となく寂れた雰囲気を漂わせた。

「ここまで来ちゃったら流石に居ないと思うんだけど…」

竜守のこの意見は、彼女にしては的確だった。『彼』と彼女は

ショッピングに街へ出てきたわけだから、当然である。
だがそんな竜守の正論に、永松は返事をせずただ歩を進めるだけだった。

「大王、ねえ、大王ってば！　ストップ！」

反応を示さない永松に痺れを切らした竜守は、彼の腕を強く引いた。これにはやっと永松も、こちらを向く。

「聞いてるっ？　戻ろうよ、多分こっちには居ないから」
「あー……いや、でももうちょっと」
「だから！　居ないんだってば！」

意地でも腕を離そうとしない竜守に、永松は小さく溜め息をついた。溜め息をつきたいのは竜守の方だが、文句を言う暇を与えず永松は口を開く。

「もうちょっと人目につかないところに行きたかったんだけど。あまり目立つと面倒だし」
「え？」

わけがわからない、と言った風に、竜守は首を傾げた。理解が追い付かない竜守を尻目に彼は続ける。

「いい拾い物だな。――超能力者の万有引力（アトラクタ）がこんな単純に手に入るなんて」

瞬間、竜守の頬を冷たいものが撫ぜて通り過ぎた。

「――――え」

それが水の刃だと気づくのに、そう時間はかからなかった。

「大人しくついて来てくれるんだったらこういう手は使わないんだけど、仕方ないね」

本能的に、永松の腕を放し後ろに下がる。彼は笑みを――それも、好奇心しか感じられない無邪気な笑みである――を浮かべていた。竜守は自身の血管が縮むような感覚を覚える。

「何で、その名前を……」

「ん？　万有引力（アトラクタ）っていう名前？　有名じゃないか。重力操作系能力者の頂点に立つ超能力者だって」

まるで褒め称えるような言いぐさだったが、その名を冠している竜守としては嬉しくも何とも無い。警戒を解かぬまま、竜守は問う。

「……大王は綾季を連れてって、何するの」

「何って言われてもなあ。面白そうだから遊ぶだけだよ」

しかし返ってくるのは玉虫色の答えである。明らかな歪みを永松に感じながら、竜守は竦みそうな足に力を入れる。逃げろ、と彼女の全身の神経は叫んでいた。

叫びはしたが、その前に。

どこからともなく、水の束が永松の背後で湧いた。轟々と音を響かせながら、その水は竜守を威嚇するようにうねる。

「早いうちにネタばらししした方がいいかな。……断頭奔流（ウォーターソウ）、簡単に言うと水流操作の能力だね。逃げる気なら容赦は出来ないよ」

「っ！」

はじかれたように竜守は彼に背を向けて駆け出した。タイミングを見計らい逃げ出すなら、今しか無かったのは間違っていない。だが、逃げ出すという行為は最早最善の策ではなかった。

轟！と水の大蛇が唸り、鱗を撒き散らしながら竜守の行く手を阻む。

阻んだものの――次の瞬間には大蛇はここでは珍しいコンクリートの道路に叩きつけられ、飛沫を散らしてその形を崩されていた。

「――やめて」

無論、そんなことが出来るのは一人しか居ない。

質量を持つあらゆる物質に存在する『引力』を、思うがままに操ることの出来る能力者――竜守綾季。

竜守は場面に似合わない、泣き出しそうな表情で振り返って、言った。

「その能力じゃ――大王じゃ、綾季を傷つけられないよ」

その言葉は、二人の間に語弊を生むには十分だった。それどころか、永松の知的好奇心を滾らせるのには十分すぎるくらいだ。

「……中身は普通の子なのかなんて考えてたけど」

「え？」

「流石超能力者」

「え、あの、何か勘違いして――――！？」

聞き入れる耳が無いのか、はたまた聞く気が無いのか。再び永松

の背後から水の大蛇が噴き出す。今度はその数は五つに増え、それぞれが違った動きを見せる。

「面白いや」

その言葉を合図に、蛇たちは一斉に竜守に向かって特攻した。

「――！」

猛攻、と形容するのが相応しいだろうか。蛇たちは目で追うのも難しい凄まじい速度で竜守に迫る。

だがそれも、竜守に届くことはない。今回は直接地面ではなく、空中でそれらは静止させられ道路に落ちた。

「ちがうんだよっ、見下すとかそんなんじゃなくて、本当にそういう意味じゃなくて……っ！？」

蛇だけでは止まらない。次に竜守を狙ってきたのは、彼女によって地面に落とされた大蛇『だったもの』であった。

裏手から這い出たそれは、自身の身体を仰け反らせて竜守に向かって振りかぶっていた。竜守は反射的に、能力を使うより先に振り下ろされるであろう水の刃の軌道を読み身を捩らせる。

ドスッ！という鈍い音がして、刃はコンクリートを抉った。その威力はどう考えても水のものではない。

「っ……！」

「こんなもんじゃないだろ？」

身を捩らせた不安定な体勢の竜守に向けて、また先ほど地面に落

とした蛇が刃として復活を遂げ追撃してくる。戦闘慣れした他の能力者だったなら、このような状況をいくらでも打破出来たはずであった。永松もてっきりそう考えていた。

だが、生憎戦闘慣れしていない竜守は思わず怯み、あろうことか目を瞑ってその場にしゃがみ込んでしまう。

「あ」

これはまずい、と永松は直感する。――が、時既に遅し。

ズシャッ、と飛沫を散らしながら、水の刃はコンクリートにめり込んだ。

「え？」

「……ふ、え？」

何が起きたのか、二人の間に少しの静寂が流れる。

永松ではない。見たところ竜守でもない。

では誰か。

「駄々言うから一緒に来てやったのに、はぐれるわ携帯は通じないわ終いには不審者に襲われてるわ……。ホントどうにかなんねーの、お前」

ちょうど永松の正面、竜守の背中の直線上に、『彼』は居た。

声に聞き覚えがあったのか、恐る恐る振り返って『彼』を確認する竜守。そして案の定思い描いたそれであったらしく、歓喜に顔を

綻ばせ――たかと思いきやすぐに引きつらせる。

白い肌に蒼い目、さらには金髪。この時点でフランス人形を思わせる風貌だが、細い手足が手伝ってフランス人形と言うより硝子細工を連想させる。繊細、美麗、なんて単語が浮かび上がる、そんな少年だった。

――これで妙に夥しい殺気を纏っていなければ、それだけで済んだものを。

「らっ、らいえ……？」

「何でお前はそうやって人にホイホイついて行くんだよ、自衛なんか小学生でも出来るぞ。小学生以下かお前は」

面倒そうにがしがしと頭を掻きながらしゃがみ込む竜守まで歩み寄る、ライエと呼ばれた硝子細工。小学生以下と罵られては黙っているわけにもいかない竜守だったが、立ち上がって抗議しようにも彼の静かで綺麗で繊細でおどろおどろしい憤怒の圧力に口を開くことさえ出来ない。

「今までにも襲われてんだろ。いい加減学習しろよせめて暴れるとかしろよ頭潰すくらい造作もねえだろ」

「怖い！　怖いよライエ！」

やっと口を聞けたかと思えば、何やら漫才のようなものが成立した。彼がただ饒舌に文句を連ねるのは怒り心頭であるという証拠だと竜守は知っている。早急に消火を行わなければならないと踏んだ彼女は、おずおずと言った。

「……ごめん、なさい」

「……別に怒ってねえよ」

「うそだっ！」
「あーもー、いいから」
適当に竜守をあしらうと、ライエは大人しく漫才を眺めていたらしい永松に向き直った。
「次、お前の番なんだけど。何か言い訳とかあるか？」
「あれ、ボクはとっちめられるのかい？　その前に聞きたいんだけど、キミは竜守綾季の保護者ってことであってる？」
「……だったら何」
ライエの無愛想な返答を聞いた永松は、「じゃあちょうどいい」と笑って言った。
「しばらく彼女を譲ってくれないかな？」
返事は猛スピードで飛んできた釘だった。
釘は永松の黒髪を掠め、そのまま彼方へ飛んでいく。即答であった。
「……交渉決裂だな」
「随分堂々とした誘拐宣告じゃねえか。……ぶち殺すぞ」
「ちょっ、ライエ！　前者の台詞と後者の台詞が綾季には結び付かないよ！」
何処から出したのかわからない釘を四本握ったライエは、竜守の指摘など無視して永松を睨み付ける。硝子のような外見のお陰で迫力は薄れているが、纏った殺気は誰にでも視認出来そうなほどであった。

「……なるほど。竜守綾季が妙に戦闘慣れしてないのはキミの仕業か。彼女を狙う虫を退治してきたのは君なんだね」
「お前には関係無い」
「関係あるよ。……キミも面白そうだから、ちょっと遊んで行こうか」

ぶわっと、水の網がライエと竜守の二人を囲むように湧き、飛沫をあげる。竜守は「ひっ」と小さく悲鳴をあげたが、ライエは動じない。――というか、まるで興味が無さそうだった。
その水の網が、幾数もの刃となり――彼らを中心に弾かれてしまったのだから無理も無い。

「選ばせてやる。――脳天ぶっ潰されて死ぬのと、心臓に釘刺されて死ぬのと。どっちがいい？」

散った水泡の中で、ライエは無表情を貫いたまま言った。

＊

怪しい笑みを貼りつけた永松と、氷のような無表情のライエ。対峙する二人の少年の顔を、竜守はただ不安げに見渡すことした出来ないでいた。もちろん声をかけられるものならすぐにでもかけたい。だが、二人の間に流れる空気はどう足掻いても断ち切れない、と彼女は悟っていた。

そして、唯一断ち切ることが出来るものがあるとすれば、それは。

空気を斬る、微かな音。そして直後に、轟という――やはり、音。

ライエの放った――というより手から離れただけだったが――釘

を飲み込んだ永松の断頭奔流（ウォーターソウ）が、そのまま空気を突っ切りライエへ向かう。ライエは少し目を細めたかと思うと、竜守を庇うように立ち塞がった。

「っ、ライエ……！」

やっと発された竜守の声は、ズドン！という重い音に掻き消された。二人の目前まで迫っていた水の刃が見えない壁にぶち当たったかのように遮られる。雫の一つさえその壁を越えてくることはない。やがて刃はその場で霧散した。

自身の技をことごとく潰された永松だったが、その表情は崩れない。ポーカーフェイスというやつだろうか、と竜守は思う。それどころか彼は、相変わらずの楽しげな声色で呟いた。

「へぇ……じゃ、これならどう？」

第二撃。今度は特攻でも、振り下ろされる水剣でもない。横から薙ぐように――まるで鞭のように、それは襲い掛かって来た。だがわかるのはそこまでで、『襲い掛かってきている』以上のことはわからない。――というのも、目視出来ないほどにそれはスピードを増していたのだ。

永松という一点から伸びているため、軌道を読むことは竜守でも容易だった。これならこれまでのように、単純に防ぐことが可能である。

バンッ！という叩きつけるような音。豪速のそれはやはり『見えない力』に阻まれた。そしてそのまま跳ね除けられる。

「ら、らいえ…」

「……気に入らねえな」

何が、と竜守が再び問う前に、永松が手を叩いた。まさに謎解きを始める探偵のように、彼は言う。

「なるほどね、よくわかった。――キミの能力は竜守綾季（アトラクタ）と同一、もしくは似たようなものなんじゃないかい？　そこまで珍しい能力でもないわけだし」

「……だったら」

「色々考えて、レベル４と見たんだけど、どう？」

「……だったら」

何というワンパターンなレスポンス。だがそれ以上に、竜守を驚かせたものがあった。

ライエの操る『見えない力』の正体を、曲がりなりにも解き明かしたのは永松が初めてだったのである。

斥力操作――簡単に言えば、そういうことだ。竜守が操る引力が引き寄せる力だと言うのなら、ライエの操る斥力は斥（しりぞ）ける力。大きくなれば物体同士は反発し合い、小さくなればそれらは引き付けあう。本質は竜守のそれとほとんど変わらない。

だが、操るのが『斥力』だというのが問題である。

「そろそろ種明かししてくれていいんじゃないかな？　ほら、ボクのは見たままだけど、キミのはまだ不確かだ」

「お前の予測で大体合ってる。それでいいだろ。それより――」

「よくないよ。ボクは面白い奴のことは隅々まで知っておきたい」

だからそれはお前だけの事情であろう、というか人の話は最後まで聞けよこの野郎、とばかりにライエは不愉快指数を跳ね上げた。

永松の饒の舌に、本来無の口であるライエが口挟みをする暇などは無かった。これで指数は二倍である。
苛立ちに対しての耐性が皆無なライエは、しびれを切らしたように溜め息をついて鬱積した思いを吐いた。

「――絶対排斥（レジスタント）。これで満足かよ」

その言葉と、ほぼ同時に。
今時学園都市ではほとんど見られない、広いコンクリートの歩道が『弾けた』。文字通り――弾けたのである。

バゴッ！なんていう鈍い音と共に、永松の足元が炸裂した。コンクリートの大きな破片――最早それは岩塊と呼ぶのに似つかわしいそれと、粉塵が一斉に溢れる。暴風と砂塵が辺りを覆いつくし、竜守視界を霞ませにかかった。

「……っ、大王！」

一陣の風が吹き抜け、辺りは一瞬静寂を取り戻す。竜守は直ぐ様顔を隠していた腕を下ろし、目前で起きた大惨事に顔を青くさせた。

爆発と言ってもさし違えない事故だった。それに真っ向から巻き込まれた永松の無事は保障できるものではない。というか、ただの人間なら確実に死亡ものだ。だがそれを起こした本人は無情にも無言無表情無感情のスリーコンボを決め込んでいる。

「ライエっ！　やりすぎだよ！　怪我どころじゃ済まないかもしれないじゃんっ！」
「怪我で済んでたまるか。死んでてもらわねーと困る」

「バカ！　……わぷっ」

漂うだけだった砂塵が、風圧を受けてぶおっ、と一帯に沸き上がった。咄嗟に目を瞑り顔を守った竜守だったが、砂は顔のみならず全身に叩きつけてきて、少々痛い。

――風圧？　思い立った瞬間には、竜守は身体中のちくちくとした痛みなど忘れて顔を上げていた。

「――今のはちょっと……いや、かなり危なかったかな」

舞った粉塵のせいでその姿は上手く掴めない。だが、声はしっかりと捉えられた。竜守は当然、ライエですら目を見開く。

砂の濃霧が退いたその先で、彼は――永松大王は、屈託の無い笑顔でそこに立っていた。

「お、大王……？」

「ビックリした。死ぬかと思ったよ、本当に」

そう言って困ったように笑う永松。笑い事じゃなかっただろう、と竜守は言葉を失う。代わってライエは竜守とは別の意味で押し黙っていた。

「さて、と。絶対排斥（レジスタント）だっけ？　聞いたことあるよ。学園都市で唯一斥力を操る能力者だって」

制服についた砂埃を払いながら、永松は確かめるように言う。話しかけられた当人は肯定も否定も示さなかったが、永松は構わずに続ける。

「ごめんごめん、さっきまでのは予行練習みたいなもの。気を悪くしたんだったら謝るけど――もう遅いか」

わざわざ明言する必要が無いほどの大遅刻だ。上機嫌そうな永松に対し、不機嫌そうに彼を一瞥したライエは、足元に転がっていたコンクリートの破片を足で小さく小突いた。

まるで、鬱憤を閉じ込めていた蓋を開け放つスイッチを押したかのように。

＊

そこからは、れっきとした『戦闘』であった。

まず、自身の主力武器（メインウェポン）がほぼ無意味だということが明確になっているライエは当然釘を使うことはしなかった。永松の断頭奔流（ウォーターソウ）を打ち破るには結局大きな力が必要になる。釘ではそれが適わないとなれば、あとは別の――今この場合ではコンクリートの岩塊である――を使う他ない。普段は釘を自身の質量で飛ばしていた彼が岩を遠隔操作することが慣れているはずもなく、戦力的には圧倒的に不利な状況であった。対する永松はフルに能力を活用できるのだから尚更だ。

それでも文句も泣き言も、弱音すら吐かないのは、彼や竜守に永松の攻撃が届かないからである。

水には質量があり、質量さえあれば斥力は発生する。ライエにとって重要なのは『質量』だった。それがないなら話は別だが、兎にも角にも目の前の鬼畜は質量を持たないもの――例えば熱、光、電気などを操作する術を持たない。よって、ライエの斥力による防御は破られることはないのだ。そう言った意味で言えば、戦略的には

彼が圧倒的有利だということになる。

ただ、目先の永松のにこやかな顔だけがライエのただでさえ切れやすい堪忍袋の尾をじわじわと腐らせていた。

永松を中心に空に舞った岩石たちが、風を切る音だけを残して彼に突撃しに入る。逃げ道は皆無。故に永松は一歩も動かず、断頭奔流（ウォーターソウ）の切っ先でそれらを砕き、飲み込みんだ。

そしてそのまま、砂やら何やらが混じった濁流をライエに――訂正、ライエの斥力の壁に叩きつける。一向に破ることの出来ない壁にそろそろジレンマを覚えてもおかしくないはずだが、そんなことは微塵も感じさせず永松は微笑み続ける。

再び岩が浮かび上がったのを見計らい、断頭奔流（ウォーターソウ）は壁を破ることを諦めてまた主人を守る大蛇へと様変わりした。もうこんなことを飽きることもなく何度も繰り返している。竜守はさっぱり終了の兆しを見せない緊迫した空気に、だんだんと緊張し放題の心をやつれさせてきていた。

唯一変化しているものをあげるならば――それは、水流のスピードだろう。

目で追うのも難しいほどに、それは飛躍的にスピードを上げてきていた。轟音をたてながら猛スピードで迫ってくる水の大蛇には命の危機を感じさせるものがある。しかし、生憎ライエの斥力の障壁は速度に関係なく作用するので、結果的には大した変化とは言えないかもしれない。

バンッ！と、濁流が懲りもせず真っ向から特攻してきたのを斥力の壁が阻む。それは勢いを殺さずままに受け止められ、弾かれるようにして後退する。

「――うーん、つまらなくなってきたなあ。かと言って打開策があるわけでもなく……」

そうぼやいたのは永松だった。このままではいたちごっこそのものだと踏んだ彼は、わざとらしく唸ったかと思うと、ぱっと何かを思いついたかのように顔を上げる。

「そうだ、ライエ君。こういうのは？」

彼の言葉と共に、濁った水の大蛇が幾数にも枝分かれする。根元から裂かれたそれは、薙刀の如く細く、高速で四方八方から二人に迫った。――否、高速という言葉では済まないように思われた。どちらかと言うとそれは――音速。

一閃、一閃、一閃。

これまで見てきた断頭奔流が重みと力強さで真っ向から敵を圧倒する剣であるなら、今四方からライエの壁を切り裂こうとしているそれは、速さとしなやかさで相手を撹乱させ首をはねる刀に違いないだろう。先ほどと比べると随分細身になった刀身のせいか、そのスピードは最早比べ物にならない。目で追うことも出来ず、気付けば壁に衝突している始末だ。

――もしかすると、彼は。

竜守は唐突に脳に浮かんだ不安に、背中がじっとりと濡れる感覚を覚える。当たり前だが気持ちのよいものではない。

不安の霧に巻かれていたそのとき、バンッ！という音と共に、水の刀が竜守の肩に触れる寸前で止まった。彼女は思わず「ひゃあっ！？」という悲鳴をあげ、その場から立ち退く。

「馬鹿、動くなっつーの」

そう叱咤するライエの声は静かではあるものの、余裕が無いように感じられた。仕方のないことだとわかっているだけに、「だってびっくりしたら逃げたくなるじゃん！」とは思っても言えない。

彼と同系統の能力を持つ竜守には、そのデメリットも弱点も知っている。――正確に言うと、戦闘慣れしていない彼女はそれらを性質だとだけ理解していて、一転させればデメリットにもなりえるということを解っていた。

例えば、今まで破られることのなかった壁は常時展開されているものではない。引力と斥力はあくまで物体と物体との間に発生する力であって、物体単体には絶対に発生しないものなのだ。つまり、この壁は『ライエ』と『水』という二つの物体があるからこそ――と言うより、ライエが『自分』と『水』を物体として認識できるからこそ成り得るものなのである。

そして、質量の大きさも関わってくる。質量が大きければ大きいほど引力と斥力は大きくなり、逆も然り。よって、細身になり質量を減らした断頭奔流は前よりずっと斥力が小さくなっているはずだった。

――視認出来ない上、質量が小さいとなれば、斥力を操作するのも困難になるわけで。

「やっぱり、ね」

「――！」

息を飲んだのは、ライエだけではない。
ドッ！と一際鋭利そうなそれが、竜守を突き刺そうと側方から迫っていた。

「ひッ…！」

竜守の掠れた声に、ライエは反射的に振り向く。――彼女がそう簡単に死ぬわけがないということを、彼はいつも忘れてしまうのだ。

竜守が本能的に自衛のための演算を組み上げたのと同時に、ぱきんと薙刀の時が止まる。だが、止まったのはその薙刀だけ。ライエに向かう刃は止まらない。

皮膚と、肉が裂ける嫌な音が鼓膜を揺さぶる。

「っ――！」
「あっ――！」

ハッと、意識をライエに向ける。彼の白い左腕に、赤い筋が通っていた。演算の名残があったからか、腕は刈り取られずに済んだらしい。傷口から深紅の液体が溢れるだけに留めている。一緒に、痛み二割、面倒臭さ八割の感情を込めた舌打ちが漏れた。

「らいえ…っ！」
「……別に、大したことない」

そんなはずがあるものか。命に関わる怪我でこそないが、やはり血を見るのは気持ちのいいことではない。よくもまあ舌打ち一つで済ませるものだ、と竜守は半ば彼に絶望する。
怪我をしてもなお変わらないライエの反応を見て、満足そうに永

松は言った。
「そんなに竜守綾季（アトラクタ）が大事なんだね。ボクにはよくわからないけど」
能力事情に疎い竜守でも、永松が高位の能力者だと理解できた。――この手の能力でライエを圧倒する人物を見たのは初めてだったのだ。
ライエもそれをわかっているらしく、永松を睨む。
「彼女を巻き込まないように演算組んでるのが見え見えだし、お陰で演算速度も落ちてるみたいだし」
「うるさい、関係無い」
「……やっぱりわからないな」
相変わらずの、というか、より一層殺気を含むライエの声。向けられた牙に対して、永松は呆れたように溜め息をついた。
「どうしてそこまでして竜守綾季（アトラクタ）を守ろうとするんだい？　放っておいても勝手に死ぬような生き物じゃないだろう、『それ』は」
竜守の肩が震える。永松の言うことはもっともであった。
超能力者は皆規格外の能力を有する。竜守も例外ではない。襲われることがあってもまず死なないし、それどころか一秒足らずで相手を殺すことが可能だ。
「むしろもう人間って言うのにも語弊が出るというか。何て言うんだろうね。異形？　怪物？」
「……！」

言葉を失う。

「綾季……？」

「あれ、どうしたんだい、竜守綾季（アトラクタ）。キミのことを言ってるんだけど」

「う、ぅ…！」

ぐらり、と竜守の『何か』が揺れる。　喉の奥で熱が疼く。

足が竦むのとは違うけれども、彼女の身体には身じろぎが許されない。

明らかに動揺している竜守を見、ライエはもう一度舌打ちをした。対して永松は一瞬きょとんとしてからすぐにほくそ笑む。反応を楽しんでいると見えた。表情を出すまいとしても、竜守には元々無理な話であった。

「もしかしてさ――八年前の事故とか関係あったりする？」

「――……っ！！」

今度揺れたのは身体と瞳。身体を雁字搦めにしていたはずの緊張の糸が嘘のように弛緩し、支えの力を失ってふらつく。同じく焦点の定まらない瞳は何も映さない。

「おいっ、綾季！」

「ひっ、ぅ…！」

ついに竜守の上体が揺らいだ。地面に倒れる前に、ライエが竜守の肩を掴む。新たな支えに何とか持ちこたえる竜守だったが、表情を見るからに確実な意識を保っていない。

「あれ、まさかとは思うけど壊れちゃった？　早いなあ、それだけ凄いトラウマになってるんだね。あの事故ももっと掘り下げておいた方がいいかな」
「お前…！」
「さて、と。キミはどうするのかな。竜守綾季（アトラクタ）を渡すか、死ぬかのどっちかってことに――あ、でもキミももう少し遊ぶ余地がありそうだし…」

苛々、とかそんなレベルではない。そもそも、『怒る』という感情ですらない。目の前の鬼畜が竜守の心を抉ったということに、信じられないほど強い不快感を感じた。
何と言うか、それは――危機感。

今すぐにでも永松の憎たらしい笑みをぐちゃぐちゃにしてやりたい、と思う。純粋にそう思った。だが、それはこの状態の竜守を差し置いてすることではない。そうライエは思い直して、竜守の身体を支えなおすと、永松に向き直った。

「決めた？　竜守綾季（アトラクタ）が心配ならついて来てくれてもいいんだけど」
「アホ、誰がついて行くか。そもそも渡さない」
「…えーと、それは死にたいってことでいいの？」
「生憎だけど俺は精神的ドMでも何でもねえからそれもない」
「……理解に苦しむから単刀直入に言ってくれないか？」

ライエが極めて小さく、呟くように返す。

「こういうことだ」

爆発、破裂。派手に音をたてて破裂したのは、やはりコンクリー

ト。今回は三度、その音がして、その分に見合うだけの量の砂塵が辺りに溢れかえった。

「――こういうこと、って――」

自身の能力ゆえ『無意識下での防御』なるものが可能である永松は、それに対して怯みもしない。どちらかと言うと呆れ返るくらいだが――

とんっ、という軽く地面を蹴る音が聞こえた――ような気がした。

永松の頭上を、身を翻して彼が飛び越えていく。

「――へえ」

「んじゃな、鬼畜」

超能力者を抱えた金髪碧眼の硝子細工のような少年は、言葉の通り『全てを拒絶』しながらそこから飛び去った。

＊

自身を石や砂から守っていた氷が、空気へ溶けるように消えていく。

永松は、コンクリートの岩塊やら何やらが散乱するそこに突っ立っていた。

（……あー、勿体無い）

逃げるにしても、後退するだろうとばかり思っていた。だがライ

エは、竜守綾季というリスクの塊を抱えたまま特攻して自らの頭上を飛び越えて行ったのである。

（最悪死ななきゃ良かったのかな。大事にしてるなーとは思ったんだけど）

そうだったならばかなり性質が悪いだろう、と苦笑する。何という最悪な王子様だろうか。

「さて、と」

永松はこれからどうしようかを思案した。彼を追うもよし、追って殺すのもある意味よし。まだまだ遊びがいはあるだろうと思う。

間を取って、永松は引き返すことにした。

どうせあの最悪な王子様は、近く自分を殺しにやって来るに違いないだろうから。

（それにしても――あいつ、絶対惚れてるって。竜守綾季に）

とある迷子の万有引力（後書き）

後日談なんかもございますので、合わせてどうぞ。

とある迷子の万有引力＋（前書き）

『とある迷子の万有引力』の後日談…みたいなものです。合わせてどうぞ。

とある迷子の万有引力＋

竜守綾季が恐れているのは何か。

答えは複数ある。例えば幽霊だとか、虫だとか、ピーマンだとか。普通の女の子が思う恐いものと、大差無い。

「――やだよ…」

だが、虚ろな目でそう呟いた彼女は生憎なことに『普通』ではない。正真正銘の化け物、超能力者。

世話焼きな保護者はライエの腕の傷を見て慌てて救急箱を取りに行ったところだ。ライエはその間に力無く自分に縋りつく竜守を彼女の寝室へと運んだ。あの場を無理矢理脱した決断は間違ってはいないはずだったが、変わり果てた竜守を見るとそうも思えなくなってくる。

「やだ…やだよ……」

そう呟いたのは何度目になるかわからない。ライエは半ば乱暴に竜守をベッドに放り投げた。こうなった状態の彼女を見るのは初めてではないから、対処法も知っている。『絶対安静』という名の放置がそれである。

すぐに立ち去ろうとしたライエだったが、自身も貧血で目眩を起こしていることに気づいた。これ以上歩くと良くないような気がして、ベッドに腰を下ろしておく。

「いや、だよ…！」

竜守が呻くように呟く言葉は変わらない。何とも鬱な気分にさせるＢＧＭに、ライエは一つ溜め息をついた。

彼女の恐がるもの。ライエはそれの全体を掴み得ない。知っているのは一部だけである。竜守から直に聞くのも気が引ける――というかこの様だし、他に全てを知っているのはあの忌々しい研究者のみであるから、どうにも機会が持てない。というか、持ちたくない。

八年前。竜守とライエが会うほんの前のことである。

竜守はそのとき既に万有引力（アトラクタ）という能力を有していたらしい。八年前で、彼女は今十四歳であるから、当時六歳だろうか。そんな幼い少女を用いて、忌々しい研究者はある実験を行ったのだそうだ。

成果は――無し。実験途中で爆発事故が起こったのだ。

最初百人は居たと言うのに、生還したのはその研究者と竜守の二人だけ。使用した施設は全焼して、それこそ本当に成果はマイナスといった感じであろう。話を聞いたときライエは、ざまあねえな、と思ったものである。もちろん研究者に対して。

爆発を起こしたのは機器類だったらしいが、その具体的な理由は公表されなかった。ここからライエの憶測になるが、今思うと研究者が器用に裏で手を引いたのだろう、と予測できる。下手をすれば竜守綾季という研究材料を奪われてしまうことにも繋がるだろうから。

その研究者が何をしようとしていたのか、機器の爆発理由は何なのか。そこさえわかればきっと、竜守の恐怖するものの正体が見えてくるはずなのである。

（……憎いね）

全くこの少女は、自分をどこまで振り回したら気が済むのか。
能力は自分より格上だし、その癖に戦うことはいけないことだとくだらない精神論を述べるし。本気で自分を殺そうとした人物――まあライエのことなのだが――を堂々と許すと言うし、その上彼を「恩人」だと言うし。
お陰で、すっかり病んでしまったではないか。

（ほんと、訳わかんね…）

彼女も、自分も。
結局彼女の手のひらで踊り続けているだけだ。

どういうわけだか竜守を守り続ける自分に、憤りに似た感情を感じる。守っても意味は無い。むしろ足手まといになるくらいであろう。
それでも、竜守はその手で自分の手を握る。

彼女は、きっとそれを知らず知らずのうちにやっているだけ。
自分は、自分を繋ぎとめるために彼女が必要なだけ。

（かっこ悪ぃ、今まで綾季なんか消してやろうと思ってたのに。酷い様だな…）

とりあえず、あいつ――永松大王は殺してやらないと竜守が、自分が危ない。自衛のためにも、あの鬼畜は敵として警戒した方がよさそうだとライエは思う。

廊下の方からばたばたと慌しい音が聞こえてきた。部屋を乱雑に使っているせいで救急箱の発掘に時間がかかったのだろう。ライエ

はその音で血生臭い思考から抜け出すと、精神系能力を有する友人もどきに連絡しなくちゃいけない、という思考へシフトした。当然、竜守の苦痛を除くために、である。

無言無表情でただひたすら燃え上がるテンションを押さえるままにＡＴＯＧＡＫＩ！！

◆いかがでしたでしょうか？企画主催者として最初にあげた小説がどうにも酷い出来でお目汚しになってしまったやもしれません。これで大体一ヶ月かそれ以上かかっているんですから驚きです。皆さんにご迷惑をおかけしましたこととともに、とにかく永松君とａｓｕｔａ様には多大なる感謝を。

◆さて、今回はａｓｕｔａ様からキャラクターを拉致…ではなくご招待いたしまして、書かせていただいたわけですが。永松君は面白ければそれでいい思考の所謂俺得キャラクターです。上手く書けているでしょうか。ホントにもう…色々変なこと聞きに行ってすみません、ａｓｕｔａ様…！書くのが本当に楽しかったです。ありがとうございました。

◆続いては我が子について少し。今回起用したのは引力斥力コンビです。永松君のキャラに一目ぼれして、いい感じに襲われてくれる子って誰だろう、と考えたとき疾風迅雷が如き速さで綾季ちゃんが上がりました。レベル５だし！面白いし！ライエに関してはノーコ

メントです。綾季在るところライエ在り。ライエは何だか永松君を目の敵にしそうなので目の敵エンドにしましｔ（（（

◆本編だけでは何だか消化不良に感じたので、少し後日談（まあ後日じゃないですけど）みたいなものを書きました。戦闘描写が無いとｓｋｓｋでいいですね！とりあえず恐らく書くであろう『とある科学の万有引力（アトラクタ）』にもちょこっとリンクするので、頭の片隅にでも置いていただけるとありがたいです。あれっ、何か宣伝みたくなってる。

◆そんなわけでアトガキがそんなに長くてもアレなので、そろそろ区切りをば。次の企画小説も近いうちに！目標は１２月中に！クリスマスに間に合うように書いていきたいなー、とか思っています。戦闘は…次のモチベーションの大波が来るまで待ってください…。らぶこめを…らぶこめを書かせてください…！では、どうかそれまで見捨てないでいただけると幸いです。

ここまで読んでくださった方々に、溢れんばかりの感謝を！

【サンプル】機械人間と新天界人（前書き）

ティンク様よりお預かりしました。サンプル小説になります。

【サンプル】機械人間と新天界人

「はぁぁぁじいいいめぇぇぇくぅぅぅぅぅん！？」

『うわっ、来た！！』

相澤一、もといＡ０１はただいま絶賛爆走中だった。

『悪かった植木っち！！謝る！！謝るから電光石火（ライカ）で追いかけるのはやめぇぇぇぇぇ！！』

「許すわけないでしょぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉ！？君のせいでバーゲン行けなかったんだよおおおぉ！！」

『そんなバーゲンくらいで……ギャァァァァァ……』

そもそもこうなってしまった訳とは。

お昼過ぎ

『あー腹減った。植木っちなんか買ってなんか奢って』

「自分で買いなよ。僕今月ピンチなんだよ」

『まあ俺達はレベル0だもんな』

ここ学園都市はレベルの高さによって奨学金などの額が上下する。彼らにいたってはレベルなどの問題ではなく、2人とも能力開発自体受けてない。植木は頭に電極をつけた瞬間痛いと言って逃げ出し、相澤にいたっては能力開発なんてものを受けたら死んでしまうような体をしているのでできない。そもそも2人とも人であって人ではないので、例え能力開発を受けたとしても能力を使う事は不可能だ。なので表向きは2人ともレベル0となっており、それによってもらえる奨学金の額が驚くほど低い。
植木にはじつは他にも収入源があるが、それでも少々生活をするには足りず、貧乏生活を強いられているのだ。

「でも確かにおなか空いたね。どこかでお昼ご飯食べようか」

『あーあそこはどうだ？』

相澤が指を指した先には、曲がり角にあるラーメンのお店。なかなか和風な雰囲気で、お客さんもそんなにいない。

『どうだ？』

「うん、確かによさそうだね。あそこにしようか」

2人はうなずきあい、店に入っていった。

「あーおいしかった」

『植木っち食い過ぎ。店の人泣いてたぞ』

店に入ってメニューを見ると、早食い企画のようなラーメンがあったのでラーメンに目がない植木は即座にそれを頼む。

制限時間３０分だったところを5分で完食してしまい、さらに植木はもう一つ同じ物を注文。さすがにペースは落ちたものの7分で完食し、１００００円分のラーメンをただにしてもらい、賞金の１０００円を入手して店を出た植木であった。
店にとってはとんだ誤算であっただろう。
植木はラーメンが大好物で、ラーメンであればバケツ１０杯分食べれるらしい。
潰したラーメン店は数知れず。異名『ラーメン店の死神』と呼ばれる男だ。
彼が昔いた町ではこのような早食い企画をやることは決してない。なぜなら、一日で彼が店を潰してしまうからである。

「あーおなかいっぱい」

植木は腹をポンポンと叩きながら満足げに言う。

『さすがラーメン店の死神だな』

相澤は半分感心しながら言う。

「やめてよハジメ君。あれなんてほんの少しじゃないか。今日は調子悪くてさ」

『あれで！？』

相澤は驚きの表情を見せる。今回の店は運がよかったようだ。

「…あれ？あそこの郵便局こんな時間なのにシャッター閉じてる」

植木の視線の先には、今の時間閉まってるはずのないシャッターが閉まっている郵便局が見えた。

『あー、あれじゃないか！？強盗とか』

「そうだとしたら問題だね。行く？相棒さん」

『当たり前だ相棒』

２人は郵便局の裏に周り、裏口を目指した。

「『おっじゃましまーす』」

「な！？なんだ貴様ら！！」

「問答無用！！」

「侵入『寝てろ』……」

相澤が０．５秒で見張りの首を絞めて意識をブラックアウトさせた。

「やっぱり強盗か」

『物騒な世の中になったな』

「そうだね。通り魔に刺されたり……」

『それは言うな』

2人は裏口から侵入し、郵便局に乗り込んだ。

『いやっほぉぉぉぉぉぉおおおう！！！！！』

相澤が雄叫びをあげて、近くにいた銃を持っている男を殴り、気絶させる。

「「「「！？」」」」

「もっと静かにやってよ。もう気づかれちゃったじゃないか」

『そんなのは俺の性分に合わねえ』

「だ、だれだ！！」

「『人間』」

実際に2人は人間ではないが、2人とも口をそろえてそう言う。

「チ、死ね！！」

銃を持った男は銃を構え、撃つ。

「よっ」

植木に向かったその弾はドッジボールをよけるような感覚で避けられた。

「な…！！」

『うし。行くか』

「頼むよ相棒さん」

そんなやりとりをすると、銃を持った男が笑う。

「はっ、相棒を庇うってか！？友情だねえ、じゃあ死にやがれ！！」

銃をもった男たちは一斉に銃を撃ってくる。

「とっ。はっ。突撃ー！！」

『ちょ、待て植木っち！！』

植木は相澤を持ち上げ、それを自分の前にだして男たちに向かう。

「「（むしろ相棒を盾にしてるー！！）」」

ここで初めて強盗犯たちと中で縛られていた人達の思考がリンクする。

「ちっ、てめえから死にやがれ！！」

一人の男は銃を乱射させる。

『イタイイタイイタイイタイ』

カンカンカン、という音がして相澤の体に銃弾は弾かれる。

「！？」

「百鬼夜行（ピック）！！（ものっそい手加減）」

「ぐぼは！？」

植木はブロックのような物体を突くように発射し、男を気絶させた。

「な、なんで銃が効かないんだ！？」

「なんでもなにも」

『こういうことで』

そこまで言うと相澤はガトリング砲を腹の中から取り出し、強盗犯たちの銃目掛けて発射する。

そう、彼はサイボーグであり、いままでセリフの枠が『』だったのも機械であるためだ。

「「な…！！」」

銃は男たちの手から離れて、カラカラと音をたてて落ちる。

「さーて」

『お待ちかねの』

『「フルボッコタイムだ（よ）』」

「「「た、助け…」」」

『ロケットパンチ！！』「モップヘッドバット！！」

相澤は腕を飛ばし、植木は右手からモップを召喚してそれぞれ攻撃した。

「「ぎゃあああああああああああ！！」」

『終わったな植木っち』

「そうだね。あ、警備員(アンチスキル)が来たよ。後は任せようか」

「そういう訳にはいきません。あなたがたに事情聴取をします」

2人が振り向くと、緑色の腕章をつけた女子中学生…天下の風紀委(ジャッジメント)

員が立っていた。

「やば…」

「早く来てください」

『あ、俺無関係ですんでー。さようならー』

「ハジメくううううううううん！？」

相澤は足のブーストをフル稼働させ、その場から去った。

「あなたに2人分の事情聴取を受けてもらいます。覚悟してください」

「うわあああああああ…」

あわれ植木はその風紀委員
ジャッジメント
に連れて行かれてしまった。

夕方

『あー、疲れた。アイス買いにいこ』

「へー、それはよかったね…」

『（ビクッ！！）』

ゴゴゴゴゴ、という音がして植木が相澤の目の前に立ちはだかる。

「人に面倒事を押しつけといて自分はアイスかー…いいご身分だね。機械のクセに」

『ちょ、ちょっと待つんだ植木っち。人は話せば分かりあえる！』

相澤にそんな機能はないはずなのに冷や汗を滝のように流しながら必死に弁解する。

「そう…でも残念だったね。あいにく僕も君も人じゃないんだよ」

言い忘れていたが植木は人間ではなく、『新天界人（ネオ）』という人のようで人ではない生き物だ。

『新天界人（ネオ）』はＡをＢにかえる能力や、神器という装備を扱うことができるのだが、今の相澤、もといＡ０１にはそんなことはどうでもよかった。

『……』

「……歯ぁくいしばれ♪」

キレた。

植木がキレてしまった。

一番怒らせてはならない人物を怒らせてしまった。

その脅威を一番よくしっている相澤は、

『…さようなら！！』

ブーストを使い全速力で逃げ出す。

「逃がさないよ♪電光石火（ライカ）」

それを植木はローラーブレードのような神器で追いかけ始めた。

その後相澤は植木に捕まり、神器集中砲火を受けてしばらく学校を休む羽目になったのは植木からすればどうでもいい事である。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4417x/

【企画】とある創作の学園都市

2011年11月30日19時57分発行